菊流

茶之湯評林大成

七

437

茶湯評林巻之七目録

當代名物茶入来由　在中庵傳記

飛鳥川　夏山藤四郎

橋姫手　玉柏手

落穂手　廣澤手

青江手　朝日春慶

真弓手　元祖藤四郎

雪柳　黄薬手

境春慶　柳手

天目手　野田手

利目手　生海鼠手

凢手　捩貫手

新兵衛焼　音羽手

口廣手　小作手

下髪手　舥取手

早乙女手　古瀬戸辰之市手

花藤四郎　糸目藤四郎

蛇喰藤四郎　姉手

却含手　伊勢手

御堂坊主　山道

遠山手　釣鐘手

利休焼　源十郎焼

織部焼　鳴海手

頸長手　渋紙手

正意手　赤絵手

追覆手　面影手

鶏手　靨手

市憺手　十王頭

半切　大學寺手

蟋蟀手　破風手

鼠大瓶手
祖母懐

擂大瓶手
茶陶屋焼

茶湯評林巻之七

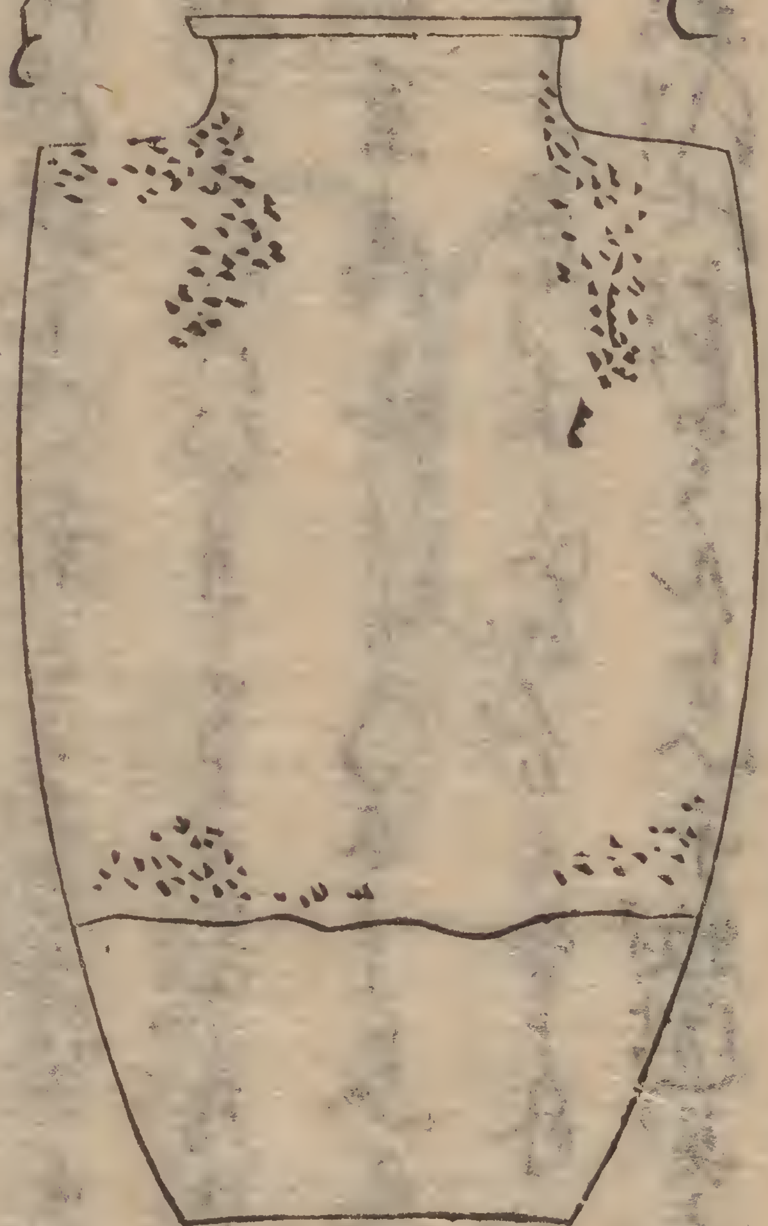
當代名物茶入之来由

一慈照院殿義政将軍之御世より千利休居士古田織部
殿まてハ唐物此名物ともハ壺瓶ともいふ小堀遠江守政一公此時
代よりハ中古此物ともハ壺瓶ともいふ古此茶入ハ長かたくして
見抜も無茶も無く入俺此瓶を遠州公末世此風
を考へ長ケ一寸斗高よし形も細く口当之又中古と
ても試百二拾年よ此孫まて八拾然ハ新物ても猥かたし
政一公八月利に古此宗匠よ八大よ播りも一物数寄に和哥
此道よ達し御一代よ名物多しも致面白茶入有之

一 前の心さへ名付侍らで故名も人二帝(ジニコウ)に和国(コク)の風俗(フウゾク)なるらん
又するかの名の茶入を出しみせしむ形(ナリ)の中も少しの違(チガヒ)は
あれども手筋(テスヂ)は同しかるべし
一 定巻中(ニキ)は十右(イニ)より名物(メイブツ)とて夜に唐物(カラ)漢(モ)高古瀬戸(コセト)の類(ルイ)を
図(ズ)して其形(ナリ)を見せしむ 其聞(ヘキ)にも委(イタツ)く ハ和朝(コ)若集(ジヤクチン)の心(コロ)
を見へ(ヨホヘ)し遠州(エンシウ)の名(ナノ)茶入を図して大概(オホカタ)も茶入(クスリ)だちを記(キス)
然ども同しきは筒(テスヒ)中にしも土薬(ツチクスリ)に少々他(ノ)の変(カハリ)有るを厚(ヒトシ)ふるが
故事(ユヘヨ)しも不及 宮学(カクガク)の達人(タツシン)書加(カキクハヘ)侍へ未(ミラ)世の重宝(チヤウホウ)なるらんし

在中庵(ザイチウアン)

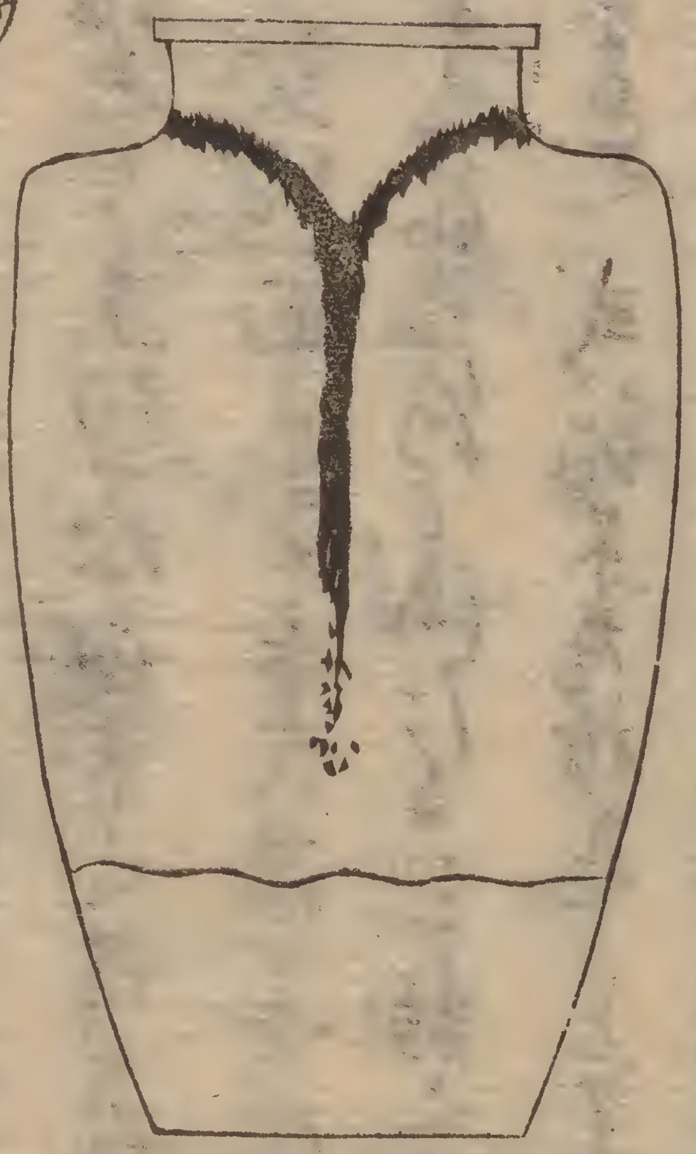
一 此茶入ハ遠州公御所持之随(ズイ)一にして無類(ムルイ)なるよし 名
をきくしてみせる人もまれなり 長ケハ二寸七分 蓋合
も同じ由 薬だちを
みる人なき由へ
宗和 然ども古今(ココン)無双(ブサウ)
と極よ申なりしとぞ
或人ハ龍(サイ)の在中(サイチウ)庵と
云事よみゆるよし 遠州公御自筆(ヒツ)にて存出しなりし 盖(フタ)
て銘つけられし茶入なれバさぞと おもはるる先師(センシ)の御誹よハ



匙ノ屋なるよしいへり古へ小堀遠州公へ水戸中納言様
御腰かけられし節額は古の休翠は御飾よ御寄入
其外庭は由分に手節は諸事は文斎にて可揃也
政一云く其世は内こや茶碗はひきてるよ其外座中袋
入角棚よ庭く御荘茶湯を致し由を申し是を
遠州に此の家よ伝らる古御米の御分も事外なる
事よろうし此は其代は宝なるらんと云千牧道具と謂
八ひまかるらん

飛鳥川

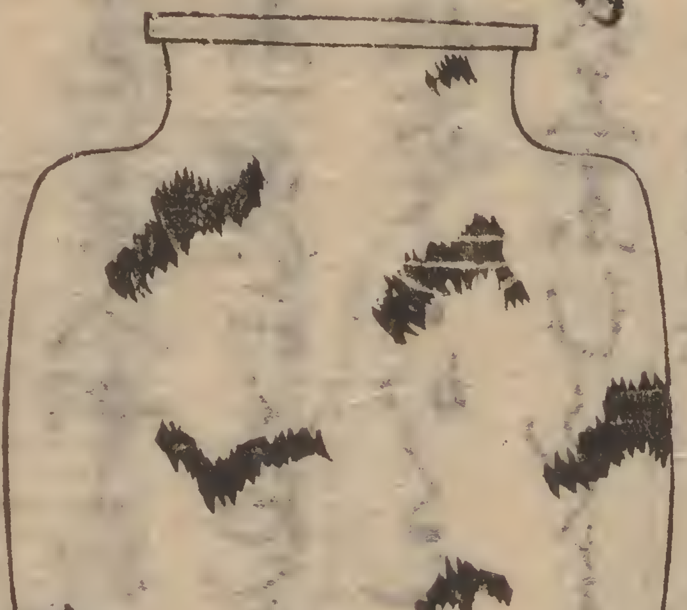
一此相見ハ遠州公若年時和泉ニ此堺なく神谷宗湛時未
茶入も見かりきし之手屋又伏見なく国よふれ候只半也
ところがかりぬへく
あるより八幡よあるべき
てはやき月日なりけ
時とて古哥を引く
飛鳥川と名付秘蔵しあるところは酒井氏に一本在



きのふといひけふとくらして飛鳥川
ながれてはやき月日なりける

元禄とハ凡弐百九十年に及ぶ當代別而もてはやす茶入之
一土藥赤色ゆく土黒(カハラケ)成るやうふして脂(ニウドリ)と和(ヤハラ)かなるを純とし
根元(コンゲン)此窯(アスカ)る川(カハ)ハ土色ハ白きと云へり口造(ツクリ)捻返(ヒネリ)し高手也
其一姿(スガタ)を花奢(キヤシヤ)に作まり糸切一際(キハ)見事(ジンジヤウ)常之作に糸切居
一地藥ハ濃(コイ)柿(カキ)藥なるに艶(ナレ)地(ヂ)一面にまる上藥ハ濃置形よく
なる上藥肩(カタ)を乱まき一節たれ流(ナダレ)たる八(ハ)額(チ)之景を
加ふ黒手とと云中あり是之 或ハ地藥鳥柿色に上藥黒
茶也くしかくてよる茶入一通ありも也 紅梅花 茶入之
よき景世に名数ある茶入之 又消(ヌリ)の如く一通(?)
かくく茶(?)の如く細工あるくすもの堅(コワリ)たる物之

成(ナル)瀬(?)山(ヤマ)藤(トウ)四郎
一此根元(コンケン)ハ遠州云此手此茶入あまた有中に是れ
て殊(?)に見事なるハ是を手本(?)にして作る(?)なり 後世(ゼンセイ)
此手をも以(?)て名付
おゐて元禄年中
までハ凡百八九拾年
まゐるとぞ

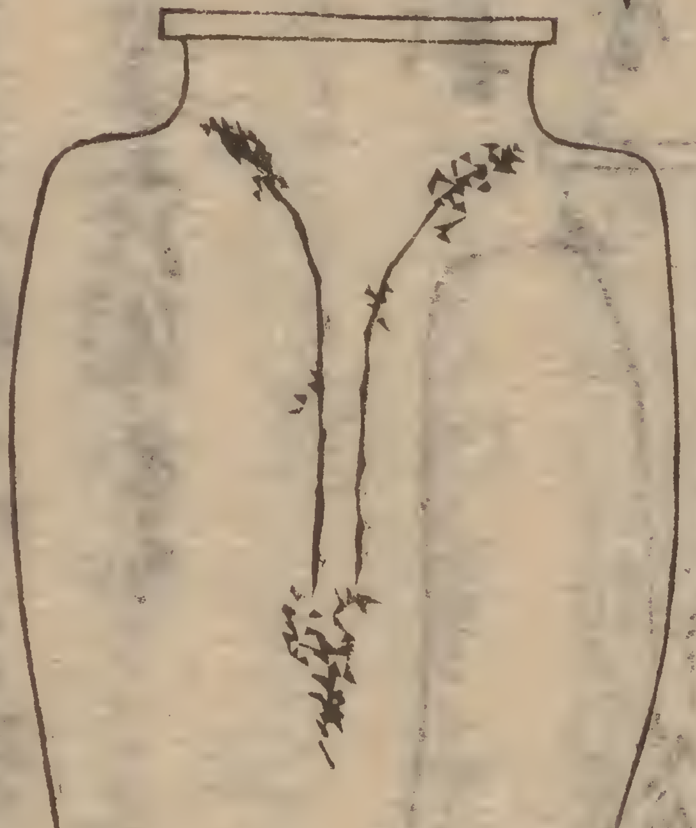


後成之
夜山(?)茶葉(?)此手(コリザクラ)(?)
あ(?)...

一古瀬戸とハいかにも白きこと又薄赤色もちゐる事有
に赤黒く見へ轆轤目有帯に見ゆる也口造り茶箸
見して指返しに内かしまた口の内にかし一面残れたる也
一下薬ハ飛ぶに濃薄き色ハ茶入毎にかゝる事也方ハ黒
き色飛ぶ沢釉薬茶一面にかゝる也上薬ハ黒飴薬にて
茶胴の上に指跡ほど下にかゝる也○又或ハ下薬落
欄形のしま黒く上添て黒ハ黒薬もちゐる也又ハ青色薬崩
薬色茶かね飛色茶入とも見えし数あり見え世
によく有物なり其外茶経他流あり下る所なる
物なり

橋姫手

一此茶入遠州公数ある茶入の中にもとくに取上てを
見る人此ありきハらしかりき事なり我も侍らん沢ハ
名をも付させんとて
橋姫と付給ふ元禄
年中まてハ元郷一白
手に有之



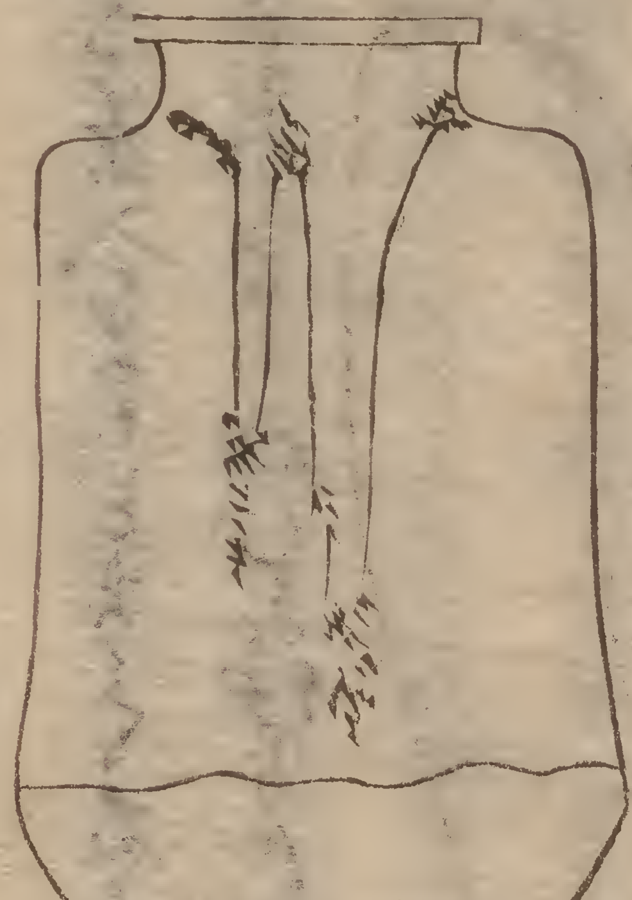
古哥

・さむしろに衣かたしき今宵もや
我を待らん宇治の橋姫

一大八にて煎じ口出にて振出し花香也 糸切也常に
葉なるは下葉粉也此滓なる葉立なるは上葉と云
葉に煎茶不してよまじ是一面にかゝる物之上葉細工と
石のよりなる物なるは又其葉此滓也と

茶柏手

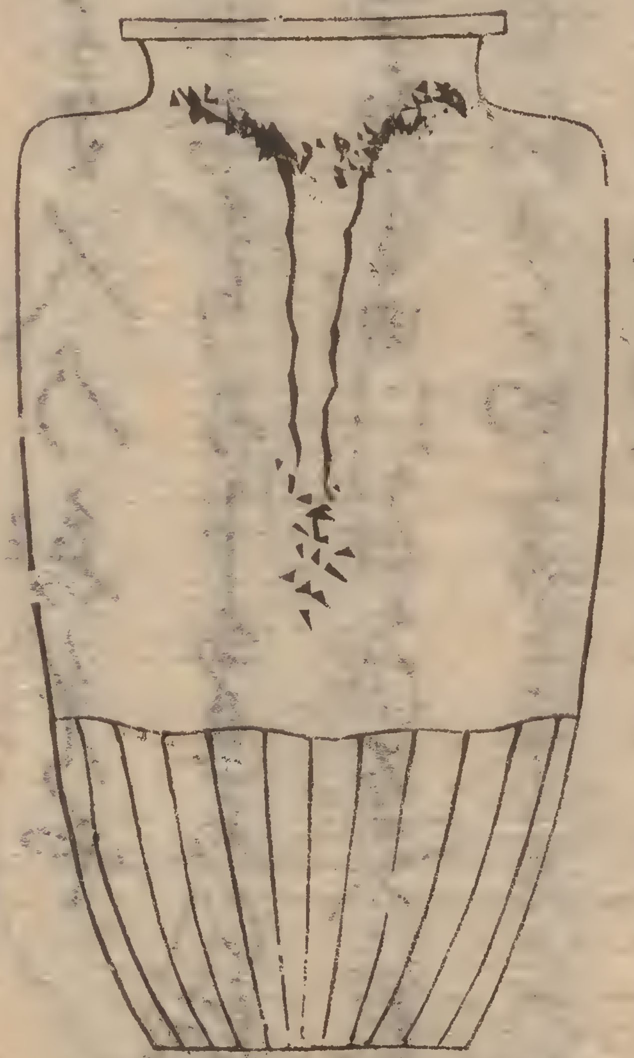
一是八小堀政一云和茂無
釜物之根也八奈良風
系茶掃津は雑波の
浦なくて花出て見
故なく此詞をと為て名付也なるは



雑波津にとりて埋れてむかし 葉
つらきこくよまし人乃意なるや
茶入此胴ながくとくしずまり上下なるものあひ恰合
なるを柏手と云一通り此手曲りけるひ茶入は数一番
也物なるは古江なく似たる物なるは上手は数之
元禄と云八凡二百余三年になるなりと也

一下葉八樹にても此艶も見茶継なく秘比なる上葉ハ見葉
落きなく一面に木目なる其内に見茶の濃不なるされ此
粉になるは上葉継常に被に習見上葉解難きこと
口傳云茶此目に細か砂なる故に也柏と云々なき式

寸七八分ある也あら物之
一 古瀬戸茶色よふし緋多き口せまき捻返し一段気高者之
糸切あらく露常のごとく見事なり
藤種手
一 此根本此茶入ハ永井信濃此御内ヨリ坂和田某所持
俊と云人此下掲有る
を小瀬戸別ニ在
此古織を以若付物
よふなき緑釉中
まく八面捻手宗易有る

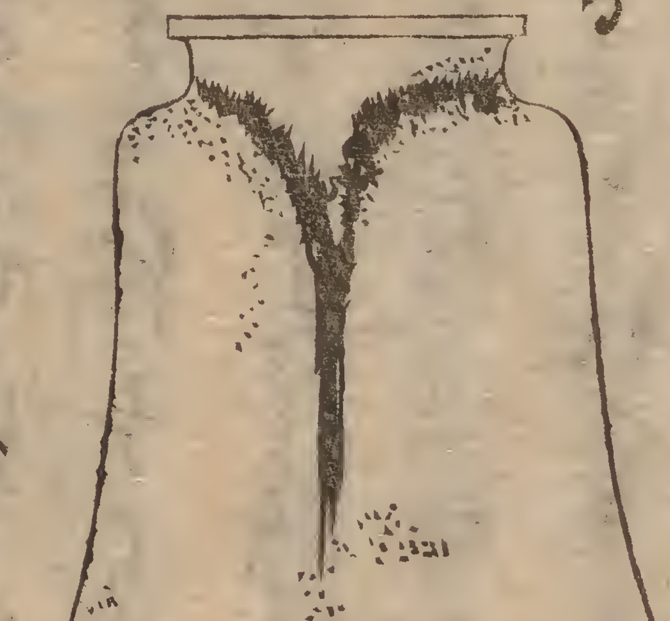


井侘く落かひろみとやすませバ
糸を回面引ぬまし物也
一 口せまき捻返し見事之糸切渦常なり
一 古瀬戸白色かしまとあり古瀬戸にも茶入ニまくなく是より
後ふ瀬戸かうかうたり様々かりたる極よ品々ある
一 下茶瀬戸黒と上茶八黒茶瀬戸くとかゝる之根本古瀬戸
種手と云物なり此てしけ中八新なる名物之又世ニ有瀬
種手と云茶入八焼き不名あり此物之古茶色此かし
是を此茶八栗色此全気茶なく上なハ與ハ茶かし流
なく見ゆ流也なる也右此二名一万なる作と云又或ハ古宗

寸此作ハ何也り細工よく小茶入也

廣澤手

一此元祖此茶入ハ相伴備前の下手之小堀遠州ニ加様と
此茶入をはまきくなる
人とみき八無悟の事
あまと無銘なく茶入
なと申候くはなれ
むひおゑを付候ふ古方の心



廣澤此作此まつもり兼しく
なる人をあまき紺此廣此事

一茶入此肩ハ口かりし処て肩衝成みて無手
古け様と申廣澤なると云無銘此広作之土へ一通とも
口此海惣なる茶入物之切者ニけ此極へかも其しかね
と胴みくかしきと云なる

一古瀬戸の様に廣沢此根本之或本作之作出惣之の
柔のあるものハ廣沢みくハかしか茶手も絶之

一口ハ捻返し一入用事也細なる也

一糸切ハ細工花者也あ之又糸切此の事也

一下茶ハ法楽也ふ相似也し茶より小ス此也し
ものまでのあるにと羅茶となく廣沢此納め

葉之上茶湯也惡し但し濃茶は揃気をからし又
或ハ下葉或揃也此惡きことを上茶にハ是茶むつくと
かゝる茶入も有之此説に深十郎伊勢平紹鴎
元禄年中より八貳百貳三拾年に成るに此茶入多く
ある由なるを今紀山にも似たり

青江手

一此根元ハ近江国志賀郡勝田氏の者えらく三井へ持たら
るゝ由其段一二ある也あるらし此表ひからひたる石を漣波と
呼ぶ其後青江此脇指を拝領せしよりかく故に世
俗にも青江手といふと云へり

一茶入此形ハ絵図のごとく肩あつく八張胴にして八方まて見ゆ書
にの此本手也自然と本色合たる形をも好む也
一古瀬戸此類か是ハ本手とは替てし又細事也
一茶切手此本手とて又
此土薬たるごとくて
小刀目此絵の形指此
添えて

一下葉 菜色ありて茶入多く叶ふとも茶の二此ごとく叶る
上茶も濃茶此一筋あるかまへかゝりて茶入有りて
も其外よりとして茶も一つのごとく艶種あるみて一つの心得

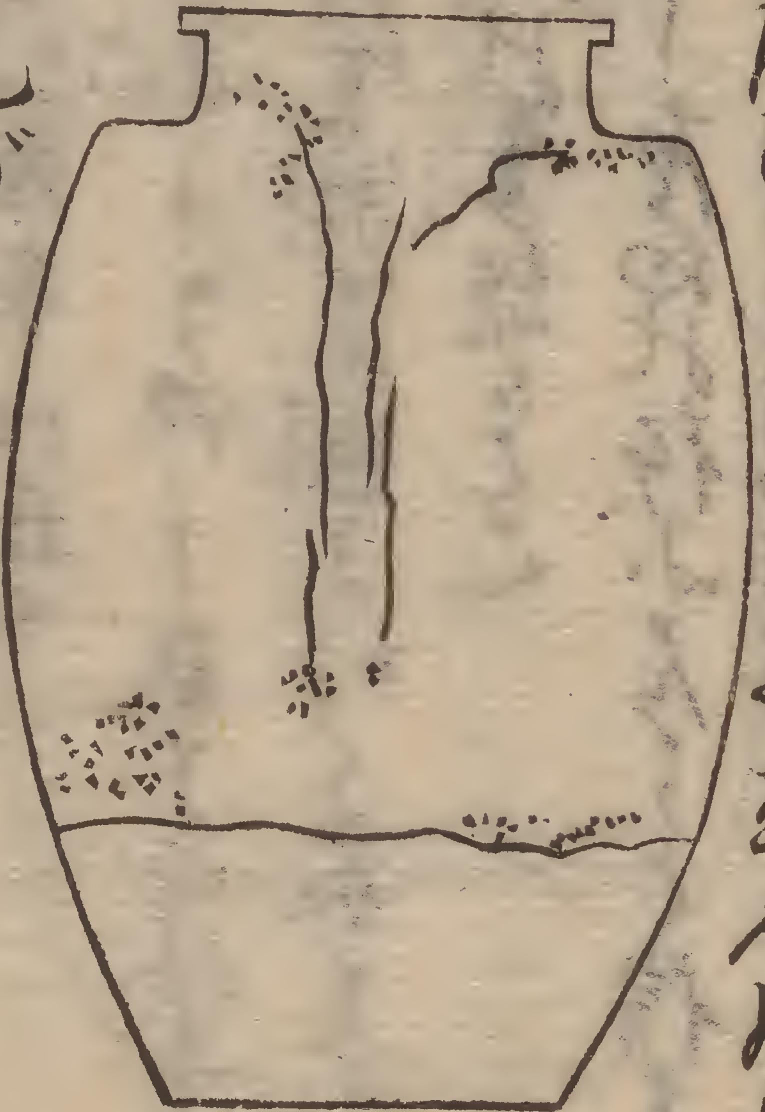
極而よく手前の茶葉ハよく柿ハ外にも申る也
一 古小堀遠州之代ニ子極幸南禅寺極同淡路守極同
飛騨守極か兄弟なとの瑞一ツ也手にて分て秘重ス八
々目利キ遠州器用之手故遠州もし別ナモし
かし或時花列ス右の内其茶入ヲ見出し宗
遠州之上進し上る遠州ニ手あつく御数ニ其手を拙子
下様ハ茶入ヲ同手之内秘蔵一ツ持と自筆ニ書くられ
御形其茶入とコア花筆此時之三ら来へしかし此切形之
茶入を書直之ハ其茶入中花列ニ有る徘徊あつく
紙ニ宗字政ニ下様之其遠州ニ此箱紙も不茶入有

跡之 無数なるもの手也
一 世間ニ青江手と號を之ハ下茶濃柿色あつく有
後藤ハ此茶あるハ上茶ハ濃黒茶ハ流れ有也八藤茶ハ鄙色
此肩衝之も其色も青江手ト八の號之寄也ても書かる八大異
一 或八古瀬戸茶ニ此茶八薄柿此黒ニ寄て上茶八黒茶もしくと
かるもとも此藤色八あるかも何にても也
一 或八古瀬戸茶ニ下茶ハ此同茶上茶あも同茶此濃色也
かしるく茶湯ニ此極有りへ有流出有
一 或古瀬戸茶ニ下茶柿色と上茶ニ八黄茶此もの有り
一 或茶立柿茶ニ黒く入れ候ニ在る糸切ニ口伝

右此名色ハ信ニ入る所なむとも数ありといへども上にて手
世然ども古より是迄別に信に入る古は手ハ三ツ
も称し古く云葉と云又其ほか古色此風ハ背きをい
ほどの人にしらさるもおほく江戸ト云葉入ハかくれ兎角
世にまれなる事なるべし凡古江戸ハ元禄年中まで
八拾百七八拾年に及ブ又云通此手ハ仲くらべハ新る
まして愚なるにはならぬとこアりけ若く見侍る重脆
ホ百貫目ホ百貫まくハ怪にもる也あるらめもか
元ハカハ上かくとこ胴高くかしき事ある事と上に此手と
知るべし

朝日春慶

一 藤四郎法名を春慶と云一年凡此は朝日と云不
小入くはつ通りにと焼ひろめうりと或人此白じ侍
るらは古胴日域より
かことを茶此名合
また古めより朝日
此かりやうり
大肩と云地のとこ色ぐ

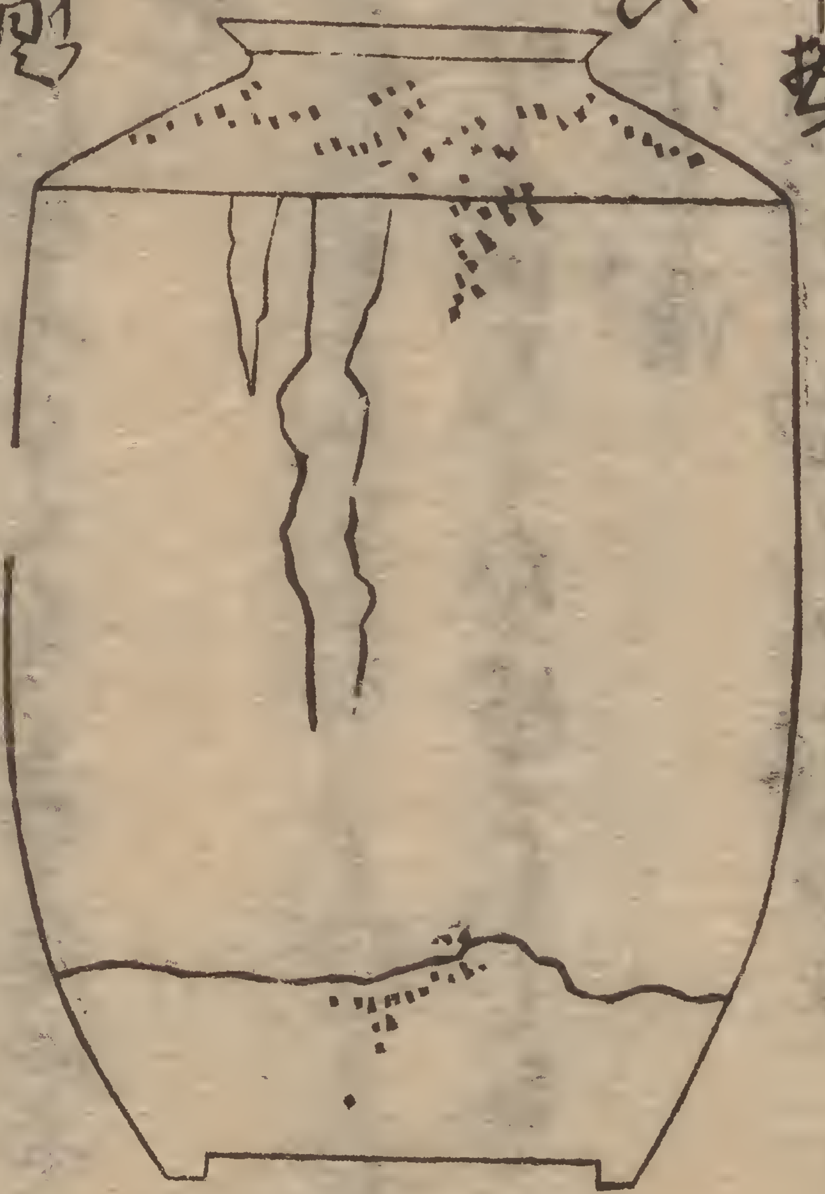


見事の大事切着此釉色あるとえり茶壺擂合細
ユよく薄手にかくれ茶事見る事ある茶入此にたぐひ

きくあ此地之　一古瀬戸茶入絶し古き故よ為古く
見ゆる之　是も世に穏し珍敷之　丸合切為年常
也　元禄より凡三百十六七拾年此物也
一下茶為栱小利茶地一面より絶し薬より此茶生ると
見る上茶了茶よ為茶飯茶出よ加へる茶茶之薬茶
此茶くゐきり此茶入此茶焼出る之
一伝云慶長頃唐物此栱小見し栱茶此
上栱茶より此茶名物も為も又八出る茶
此加ふ年ふよ日本にて一ゝ目出度ふ唐に見へる八寸
之代より出来る物也上此手為之

真弓手

一此茶入此根元ハ小堀遠江守殿改一ツ此家目利所々瀬戸方
此下料由を見及し当
新此茶入上底のまい
中古之然ども遠州
公御目ききめく為を
御付故為るを
此手ハ真弓てかと云也



一惣高サ二寸　胴此張めぐり部寸六分　肩めぐり八寸弐寸口さし
ぎハまハり部寸六分　加へ此長サ六歩　茶留まで廻り八寸七分

一 口は指渡し壱寸五分乃至壱寸三分五厘ほど也る之糸
切かし古筋赤し水葉ある
一 下葉茎葉皆葉は友葉也く紫白るる常 葉留
乱る留ちる也
一 上葉肩まで丸く黒茶葉ちりぢくと有る常葉
留より下は黒葉ある ほまりわれさどもなし
一 巣腸蓋並付 作半清
一 袋茶葉は宝尽之緞子 緒つき薬湯
一 挽家紫たん口は金銀やきん也く三百つく金かぶせ
忍切裏留緞子外袋相

挽家の蓋に銀かんなく合
遠州公の筆 外に紙書
を与たる筆に何事

真弓

右は肩衝の茶入 上の遠州公の好み也く古来る之
一 外箱物一幅にて是も改一三は茶入に名を付
八言の心之を本書と丹尺に切く?
を箱物に古くる之
一 上下茶袋は古緞子 中は緞子一文字
風帯茶袋は銀らん如?古き切之軸をげれは
付之

真弓

ゆとらへて引ならすのと　梓弓
まゆみつきゆみ　引ならす　あつさゆみ

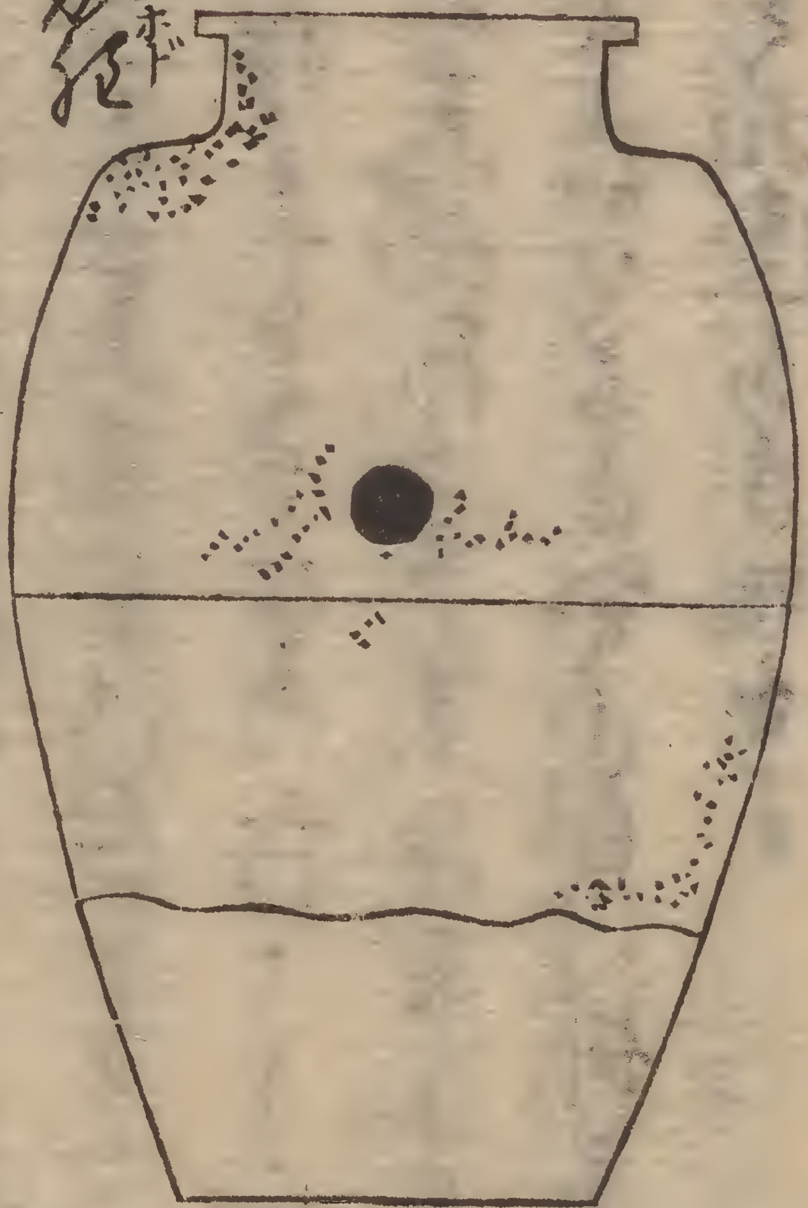
數々に真弓とも其外色々の弓あれと其内の茶入に用ゆる也　海ハ浦の事也　藤四郎か様の茶入に人のこのむ也

元祖藤四郎

一茶入ハ肩衝多し又ハ内海　瓢箪　其外種々あるといへとも薄手にして細工相とゝのひたるよし
寄類は也

一土ハ浅黄又ハ鳶色　白土も有　鼠色なる土あり

一口ハ捻返し　丸底



一糸底丸糸切之轆轤目茶入有也　糸切也のけ所なり

一下薬柿色にて中くらひ有る薬也

胴より一筋ひく、此すぢある上薬ハ黒飴薬といふ
此外にも濃薄き色あまたかはりあり、或ハ上薬柿色
にて滑らかなる薬もあり上薬茶薬に飛薬なるもあり
也。又ハ黒き色に柿薬もあり上薬ハ柿色にて皮也
ある一色に柿薬黒薬照たる茶色薬胡麻薬落黒
薬ある之薬色ハ極くよかるとも手黒引掛ある茶入ニ
かはりなどを紛ふ事なく相違なき物なり
一 後窯中興茶入ハ元禄年中ニハ三百年余に成
なる也。又古き茶入の金気薬にて上薬能此飛薬なる也
七八分三寸まで八分の数多も古き茶入もあるなり

一 元祖藤四郎作茶入小堀遠州公ニ経月一覧茶入
なかりしハ名をと付一つなりと御覧じて遠州御好みなる
名をも付られし其茶入今ハ切形にて中比の
此分上かるよ畠山の星ある茶入ハ茶入此
なかりしてと申により上茶入此星ある遠州公北斗と
名付給ふ河合筆まめく挽家此面北斗外
あまりも遠付と云如し心を思ふべし

如北辰居其所而衆星共之
注ニ北辰ハ北極天之樞也居其所不動也共ハ向也
言衆星四面旋繞而帰向之也

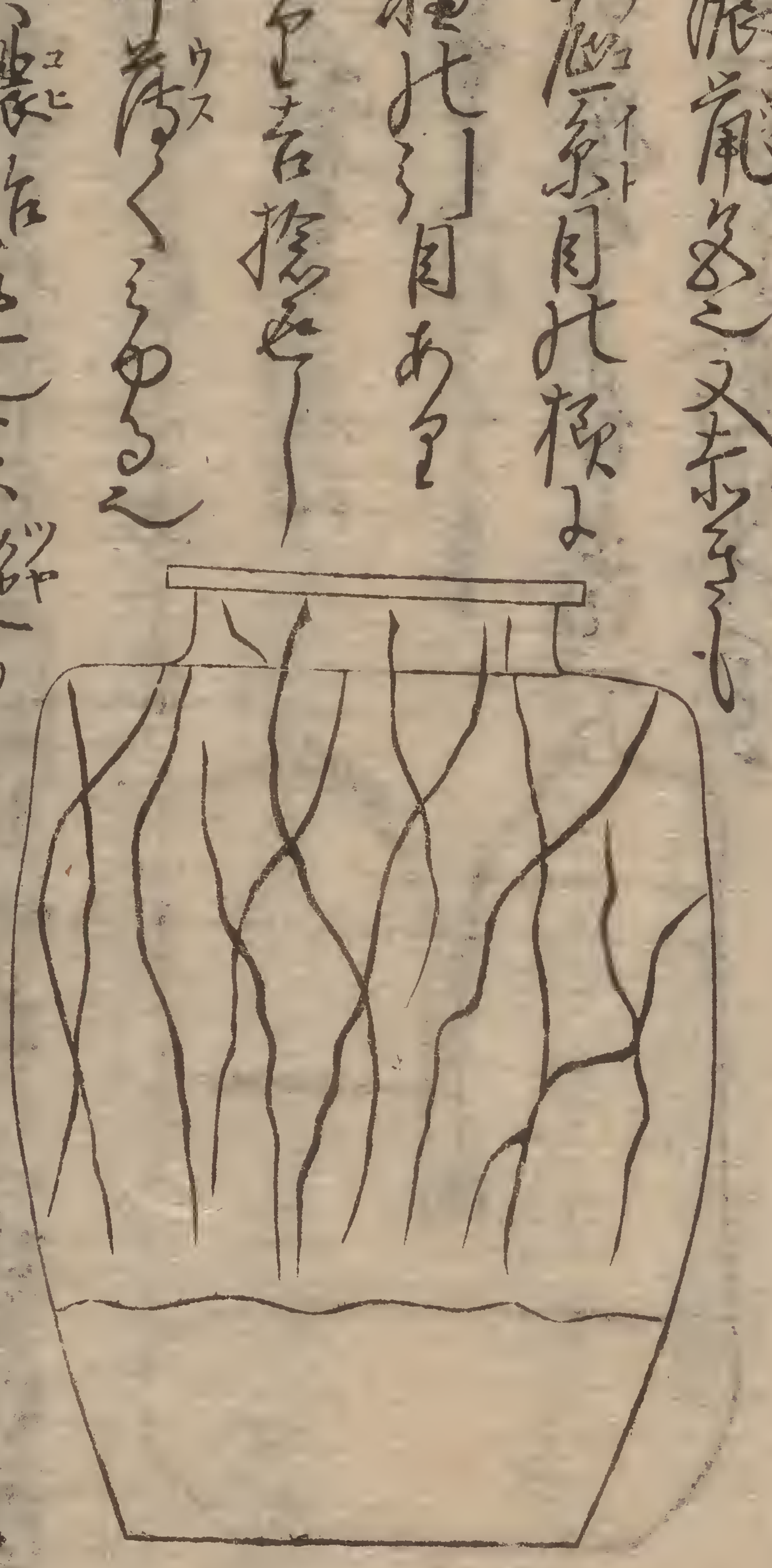
右此心ゆく所をとくと見てしかるべき人ハ此茶入をとくと
てハ諸人(モロヒト)の目を向(ムカ)ひたりとも心にとめぬやうにしるべき
事後之(ゴト)ハ二ツ(ニツ)なき此代の宝(タカラ)なりと家(イエ)に別して大切にすべし
持(モチ)末(スエ)まで此由を伝ふべし

雪(セツ)柳(リウ)

一此茶入の根(コン)元ハ小堀(ホリ)遠州公家の臣(ナ)同村瀬(ムラセ)氏浮所持せし茶入之
柳(ヤナギ)の枝(エダ)に雪の降(フリ)かゝるに似(ニ)たる故に政一(マサカツ)公古歌(コ)の
うたによりて名付給へり

朝雪　かつきえやらぬ此庭のおもの柳
よきつめたる滝(タキ)の糸

一茶入の相(スガタ)ハ絵(エ)図(ズ)のことく上(ウエ)手(チ)にもよりて根(コン)元(モト)ハ春日
の胴張たる也之組上ハ歌にて能候名也
一土ハ濃(コヒ)嵐(子ツミ)色之又赤き
も左と土(ツチ)一(イト)糸目此様に
轆轤(ロクロ)跡の目あまし
一口造り吉様也し
此滓(サキ)薄(ウス)くかゝる也
一下薬濃(コヒ)飴色之茶艶(ツヤ)つよくとくと見て上薬ハ作也此
赤くまた上薬の入交(マジ)りたる黄茶飴色の茶ともなり
白くなくて柳(リウ)枝(エ)に雪降(フリ)かゝりたる様にまるで絵

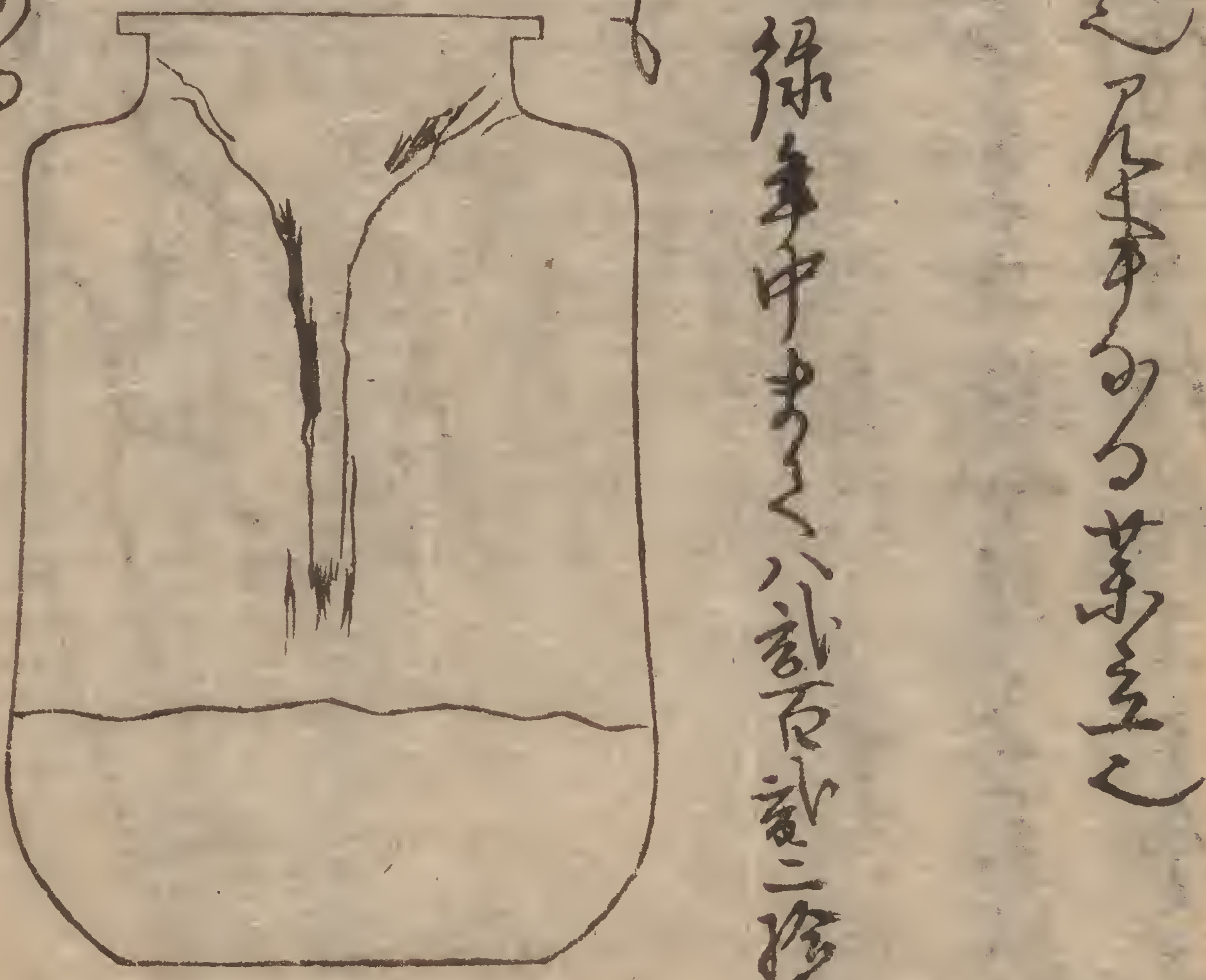


濃色茶ハ少くうすくあるゝ入手前ある茶立之

・黄薬手

一 古中古黄薬手と云ハ元禄年中まて八拾百歳二拾年斗
あるる形ハ色くろきとも
釉く黄薬ある腐好く
らもあ黄葉ハまゝとまる

一 口生ハ地ともし古器
耗着之下くよ箆目ハある
採よくあるゝとも色濃様ハ色も　下葉黄色ハ黒ふ黄ハ
切くあるゝ之 又浮疣もあるゝ茶を立らるゝもまくりゝ之



一 上葉ハ濃色ハ濃茶葉 當時肩ハ地て引まハして一筋た
けとあるたる色之茶色流ゝ入よく流れたる地之もを
故ニ黄茶中と云也入もむ茶入 故ある色之
も白く地葉色茶ありて黄葉一筋あるゝれたるもと えも
入ね茶入之

一 濃黄葉中と云もの元禄の中ころハ凡百年斗あるゝ陰年にお
も濃茶くハ少し黒くハあるよりて下葉色
あるゝ黄流もとはやく新あく入茶入ハ上下脇ハ筋
お国のしせハ類ハ世ニ沢山ニあり古中古ハ黄茶葉ハ少ある色之

一 濃紙の如く時代大口ありて黄葉ハ流色ありて下ある一筋ある也

一 杉目茶入下茶よりよき茶流也 何れ是も下造之

一 同茶事とて古瀬戸にて下茶桁のごとく古きものとして

茶入の胴より上を古茶のき八分赤き大名の標なり

胴より口まではへらめとしてうすく見事なる茶入なり

茶入の同八茶茶のなりと云として其上よ茶茶なれど

也 是茶入も重宝などなる趣也

堺春慶

一 是八利休の時分和泉の堺にて焼たると云説は非之

実八春慶と云尾張の焼目なく竈を立て焼出せし

故よりこ本手物なり之

一 古茶入之もよ波枕と云秘伝あり

一 口付と揆ありし茶入の小さく羽常之 腰帯あり

一 丸茶切の瓶口縫目花茶着也 此手茶中まく八分

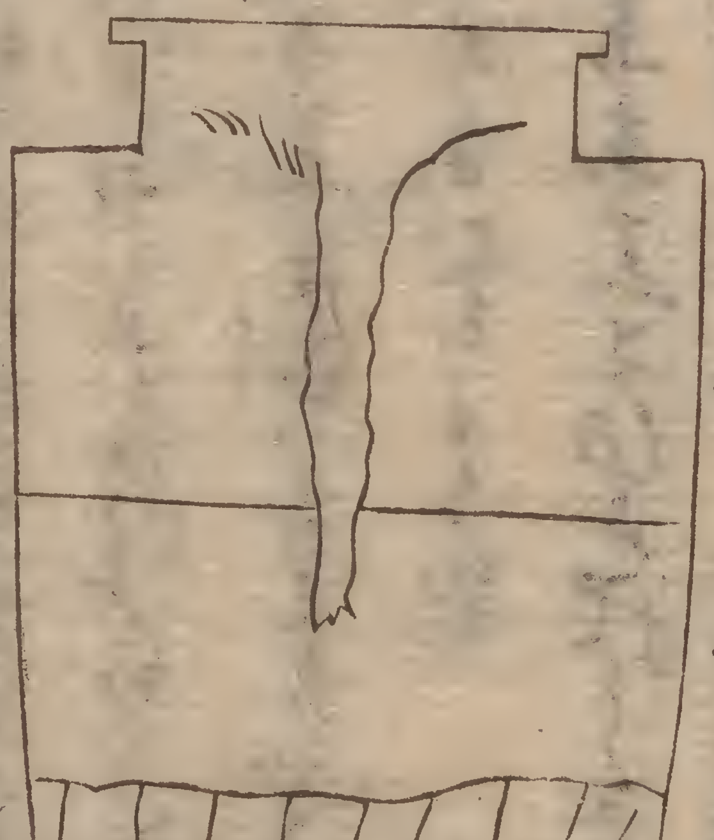
百丸擬ほどなり

一 紫茶入を嘗もある

く口まで茶の胴より

古茶入ると中半透き

古茶入は紛らはしく見ゆるとて此手之



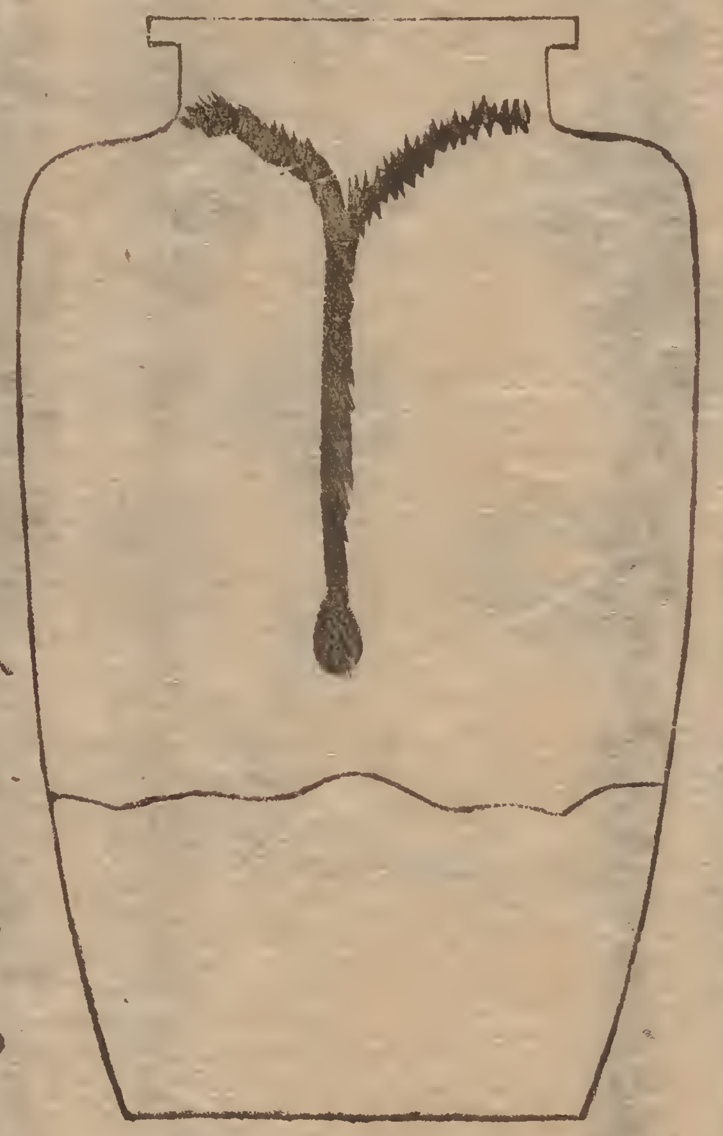
一 下茶紫の柿之茶入をよ銀なる金気ありなる之

友の茶柿のごとく一箱在と流也 総釉の茶入と志

やうなどとある之長ケ弐寸八九分三寸まで用るハよき也
之金絵紋まくらもある又世にみるくらくましきを見しも
淡ひ真鍮(ニユンチウ)之当流に用ゆ時ハ分る大きによる出短(タン)ハおちつさる
かならず同じ口用ゆべく寸法ほどよくてせぶくる也之
一 細目(サイメ)ちよく黒めかる葉ニ(ナリ)ハ色よかうまで前(マエ)に合
気比有る色を見るもよくおちつる也
一 金気ほどく葉立黒さび色ハよくこゝろる 種々(ナリカツ)錦合
細工能ハ尺寸之古銅淺黄又茶ひ色まへ古き第一又一
而よ銀さび色をとろやうゆく黒(トモ)葉比なで色あく能
一 流春度とハ大よ当り下(ゲジキ)あるうち也之

柳手(ヤナギテ)

一 此根元(コンゲン)ハ花を別(レウ)に実東(クワントウ)よくありて折節(ヲリフシ) 小蔓(モウカ)比種(タナ)
比端(ハヒ)よあるとある筋ひとまぶしと かるく繁(ゴ)を留(トメ)く本(モト)の
筋へり古前比心之
巻つけ筋よ又後よ
路(ヒラタメ)て端(タンポ)ヽ振鼓(フリツヽミ)とも云
手段ハ二流(ナガシ)裏表(ウラヲモテ)よ
一 振鼓(フリツヽミ)比大豆(ニメ)比さりくるをなへて右付るゝ

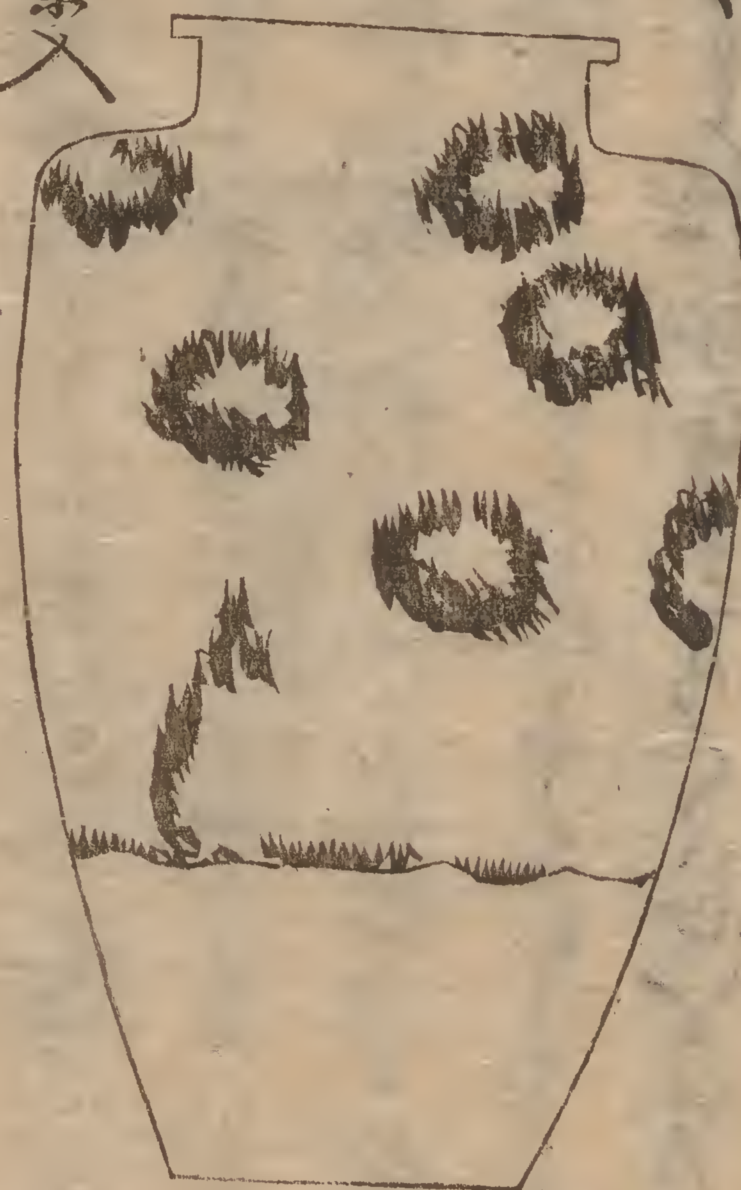


古今

比比べよ流水(ニミズ)流(ナガ)く 柳(ヤナギ)けげ
出ハしとく枝(コリ)立(タチ)節(トニ)にとつとも

今此茶入ハ浅井氏所持と云り　口造り捻返し薬
手なくあまり　土白色にかしまさなる
一下薬黄薬色薬之上薬濃多比はなく茶入の肩
をこえまき流色なる也薬留り厚くして見事也
外に薬継あまき也
天目手
一瀬戸の天目手なく建盞の天目をうつしく薬留り
あかくきんびかり艶くして見事なる焼鈍絹の様なる
薬むらくと入まじり也薬厚くあまる也元祿年
中より凡三百年にも及べり古瀬戸の類也

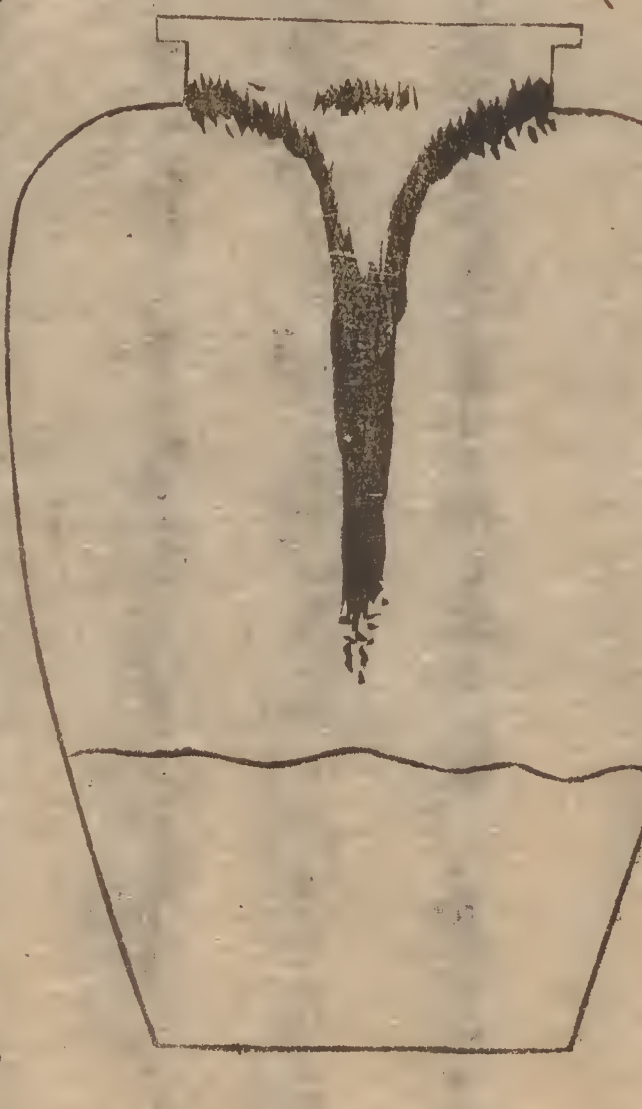
一右薬赤色の堅さもなく石目なる
一口造り捻返し也　糸切ハよく底おほし
一下薬薄墨なく
上薬黒薬の滑り
ある多艶よし
一与名年の比出し氏
よりかん人古き新しき茶入
と売に来る人あり其中
當なる長七寸の茶入
なることを夜更の時辰ら色しよ念を夕来らるよし
持ち親ちらし氏にいかにも一の茶道として夜て所宅し庭に



かくひつなるをたゞ〇にしるし無上一ハ茶入
なる也此民田手なる遠州公と小堀大膳ハ古瀬戸
三河守参竹節瀬戸ハ大目手にて名物をしるし
とく白上筋なく吟味ありしより大目手と掲り金
子六枚ありく生駒付しなとも中く一露茶入あり
ありしことくと不移之無ハ紐ある人ハまとまる也之
いり程ハ少道具棚なとも其外なとおし
好人此古筆種道具好る方ハ心を付く
手習人かいりかきなとたるく爰しハさハざる
物くハ其茶入ハ古白しなとかゝる也

野田手

一 此根元ハ奈良の野田屋と云茶人の所持たるか引小堀
黄門居とる所にて好手なる初に遠州公目利事く
外ニ名物もち
已此名字をしるく
茶入ニ付るゝなと之
一 或人曰遠州公野田
此蔵所ニ在茶の時其茶入の名を設名
名を野田と付るゝ所由ハ此本説なからん
一 古来の此文し其上る茶柔りあるなり



一口先ハ捻ゑし右手之条切ありくとこへて紀差(キヤベニヤ)
之葉漏ハ厚くして上等之元緑手中まく八凡
百六七年よ及ふ
一下葉濃(コヒ)横(ヤキ)ハ少し黒あり上葉茶入比首(カン)をとれ
ましし濃(コヒ)ハ葉比流也一同じけりは茶入以後も気(ケイ)八
よ紀楊かハ又黒葉よ葉以葉まりて当(ヘ)き也もすと
木目(ノキメ)手(テ)
一口葉入八葉比肌(チハダ)よ筆比絆(サキ)少く突(ツキ)さる一ニくよ
細(コニ)かる上葉一面(メン)よ同じ也して少さく跡(アト)を指(サシ)
て手(ノキ)取とも云ハ香故り葉壱ちよ茶入比手とも

一古赤ハ色少くおしからくこかる也
一口先ハ捻ゑしん爰之条切細く苑者之
一地茶八前赤少くおし黒ゑとよ茶也よとかるに
上葉ハ八些器ハ黒氏
こかる黒葉くし建(ケン)
盞(サン)状くよ此茶の中
へ入交(ニシ)りハ木目(キメ)同じ
加羅茶佐ハよ脂(ニトリ)と艶(ツヤ)能ぬとよく手比也黒葉又黄

葉比流也かくもも同じ計寸七八分位比茶入八斗三百貫
もちるこ也ちかる茶入之元緑手中ハ八斗百あそ緑子

めも及ぶ

一 操糸目（ノキメ）手 是も百年にも及ぶ 胴締（ドウシメ）は時代（ジダイ）は手に紐

似たる也 茶入茶など 何れも口作りよく 心あるべし

下直なる也

生海鼠手（ナマコデ）

一 奥州（ヲウシウ）金花山（キンクワサン）は楪原（フモト）は生海鼠（ナマコ）の薬（キ）也して金色（キンシヨク）之土

茶入は茎並見るに似たる故に 伝へて云之 大し類（ルイ）世子

またなる是も上々手は作也 元録年中まで

二三百年にも及ぶ 古手（テキ）也 三四百貫とも して 望 なる也

一 古出来は薬（ヤハラ）かなる物也 口作（ツクリ）よく 少し広（ヒロ）く捻（ヒネリ）

返し 一入 絹（ミニ）帯（ジヤウ）にて 土色薄（ウス）手（デ）よく 細工（サイク）吉（よし）

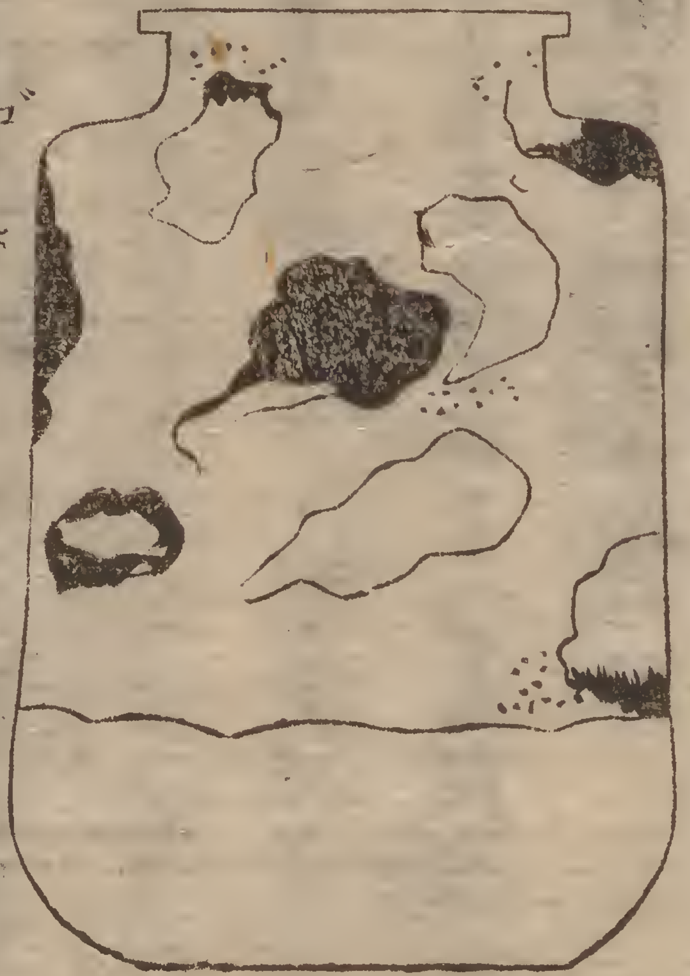
糸（イト）切（キリ）細（ホソ）く 花（キヤ）茶（ミヤ）之 切様 一際（キハ）見事也

一 下茶入は 底（？）茶入之

上薬は黒茶 濃（コヒ）薄（ウス）

也く一面（メン）に入交りて

ちらちらと切る也



是を生（ナ）海鼠（コ）茶入とも 胡（ゴ）麻（マ）茶入とも 謂ふなり 肩（カタ）

まかり 胴（ニトリ）と茶は他なるなる也 如雪 黒き 茶茶入

紐（カミ）よく手は也 茶は多出（アコ）いろいろ 生（ナ）海鼠（コ）は色よ

純似ニ之事

一 金龍(キンリウ)山は山中も奥州金山(キンサン)の地色(チイロ)によく似(?)て云 銘(メイ)

古(?)薄茶の黒(クワク?)也之上葉摘茶の艶(ツヤ)純茶之上茶

もとらくと一面(メン)にかかる土茶の大分よりかゝるを好(コノム)ゆへ相州(スロタ)

八筋(トタ)錆(ワキ)も見え又糸(コ)張も見え上々 都合(?)よろしき八中海(ナ)風(コ)

あり もまけたる物之然ても生海風と八葉の信(リウヒ)筆(ソウ)也 アラキ心

一 蛤(ハチ)金龍山とて中一通見ハ第(アラニキ)者也之

一 油虫(コフラムシ)よとやきたハ向し 葉の金龍山と同事之

一 金龍山向上此葉混(コキ)餅(アヌ)葉 乗(ハヤメ)月信口出錦(イヤニキ)茶

御(?)見えも下(ケ)作(サツ)物之

瓦手(カヨツデ)

一 此名は坂本(ナコ)手(ギ)ハ茶入の形にて秘(ヒ)蔵浅(アサ)く凡世(ボツヨ)に

出来たる八印押て自(ジ)焼の品(ニ)深(フカ)く 古(ヨウ)信調の縁(エニ)

を用ひて作(スナハ)る凡(ヨツ)と名付て見をいふ

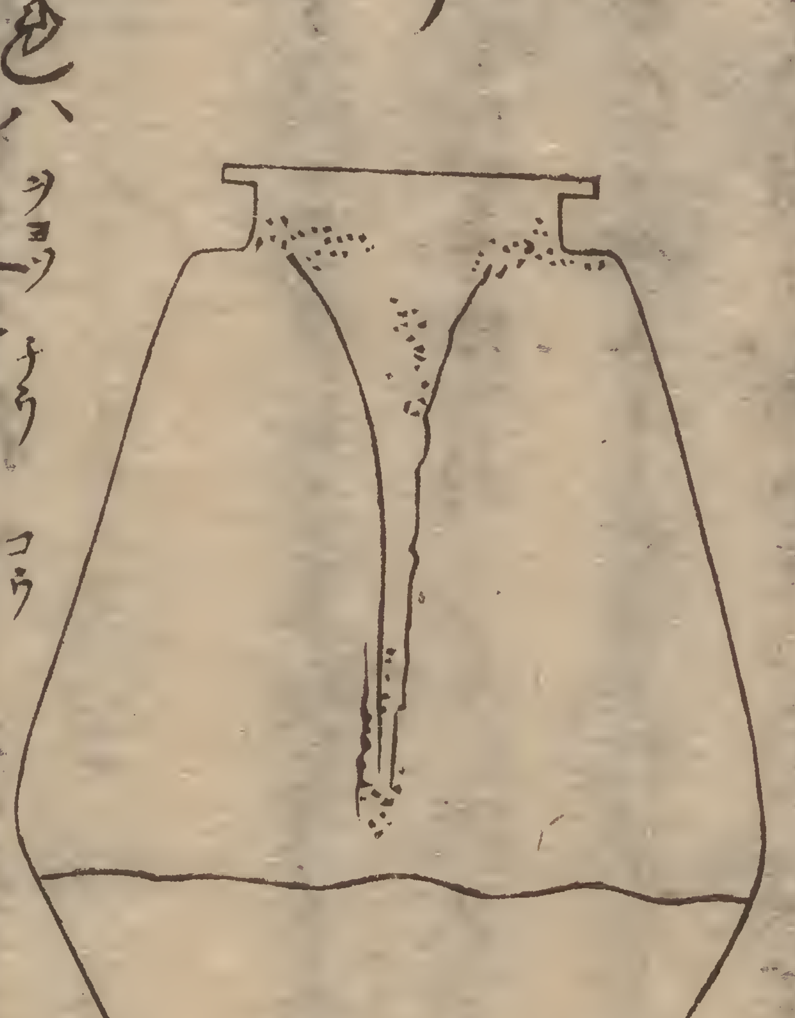
往古(オウコ)の

瓦(カハ)振(フリ)を

利休(リキウ)織部(オリベ)

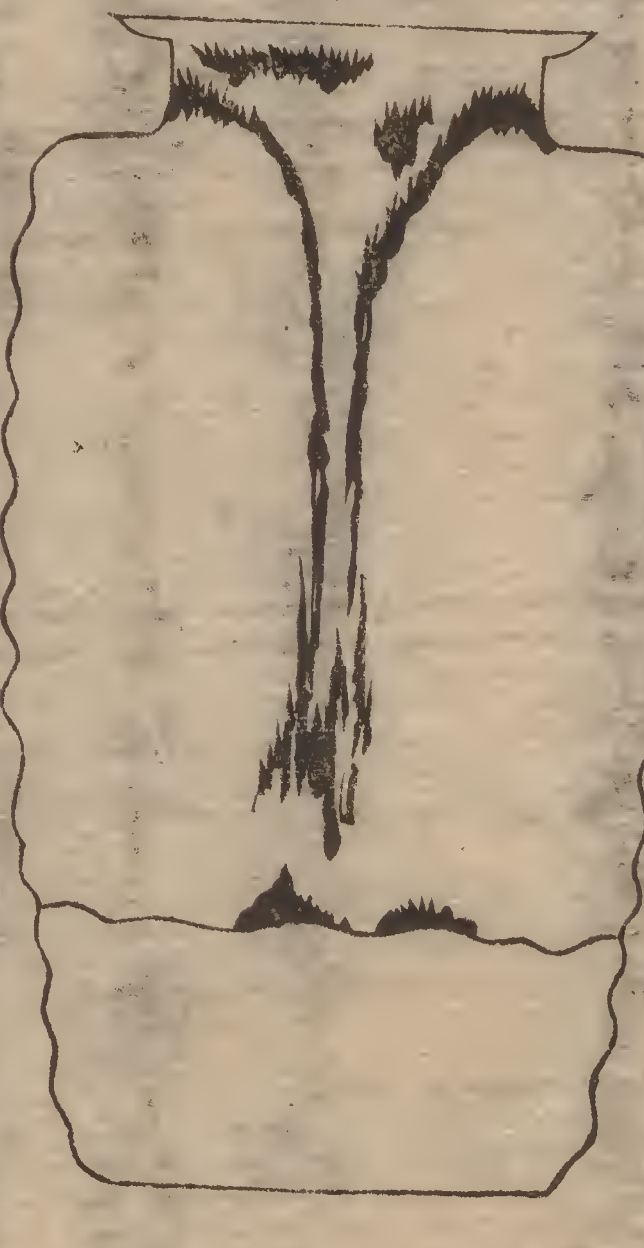
似(ニ)る色(ゴ)ごと

時代(ジダイ)とも也ハ 瓦(カヨツ)中(チウ)興(コウ)



一むかし也此細かなる物也口造(ツクリ)捻返(ヒネリ)し花奢(キヤシヤ)なると
糸切細(サヽヤカ)なる也
一唐茶栗(クリ)色也此金氣茶此ハ手なる茶入也上茶入ハ
濃茶(キ)入茶此流(ナガレ)也かなくらべて見る也外に茶入又あまた有之
一元禄手中まで八百六七捻手になる飴(アメ)茶茶入茶下に
これある肩(カタ)ハ八川肩(カタ)なく肩まで角(カド)あまりて付之油茶のなく
肩同茶入系(ケイ)に茶入茶此流也たるもので代百貫(ガ)
二百貫まで
一肩衝焼(ヤキ) 利休時代此作者也此焼物も古瀬戸(コセト)此庭(ニワ)の
とも一品がけたるにまいて外(ホカ)此自(ミ)作(サク)ハ悪(アシ)きなし物なり

捻貫手(ネヂヌキテ)
一捻ち貫(スキ)といふハ一片(ハン)宛(キ)此蓋(フタ)に用る又ハ鉄(テツ)地此背(セ)
に捻ち貫(スキ)と云ふ名を其名(ナ)にまかせて名付(ナヅケ)る
也
一土赤き土に緋(ヒ)色(イロ)
底(ソコ)おろし土ハ柔(ヤハラカ)
なる也又薄茶土
なり

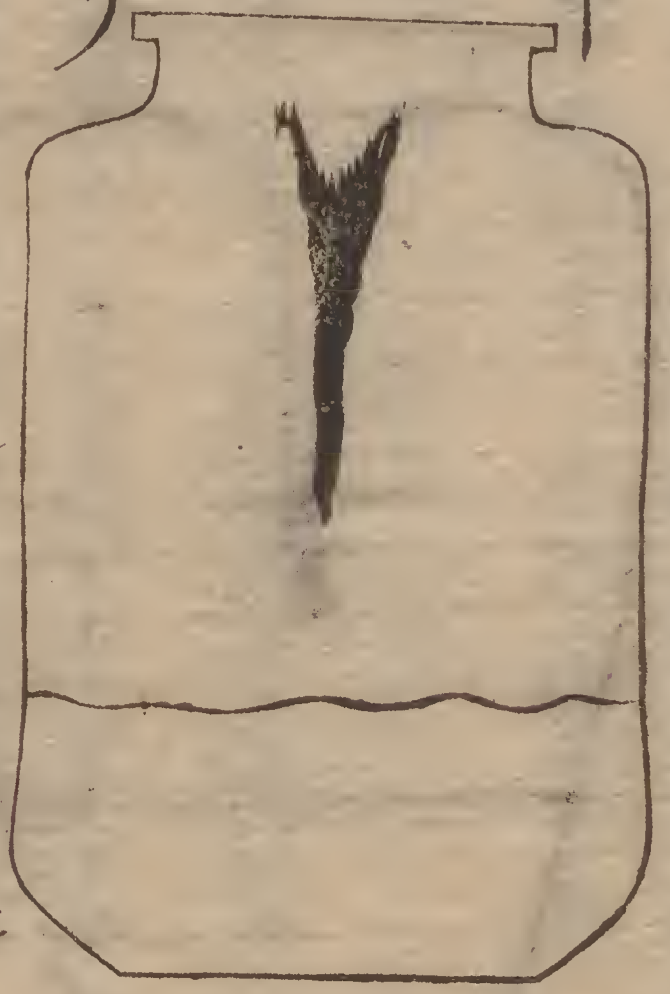


一口造り捻返し腰から下として薄(ウス)き也之糸切ハ
なかなか切めくハ手なる也之

一下薬に代ある薬也是ハ上てハ茶入又混柳を
めく張つなき也
一上薬黄薬黄と白き紐絹まじりて継ぎて置有
なれと細くなるをたちよき也然とも継目は見苦
きなるハ下品也常に茶と膩と細き茶入ハ金二枚ほか
一百貫ほどもする也
一上薬ハ黄薬ハ多くとして黄漉也又黄薬入ハ
摸捻貴ら云古き摸貴ハ元禄年中より凡百八九
十年に及ぶ摸貴ハ一百年前後今より千上
ヘ五拾日傳なる

新黄瀬焼

一此茶入京三条通瀬戸物町にて庸白黄瀬として
古り昔也其濃は瀬戸へ下る茶入を焼かしむ名人
によりて作りたり元禄年
中より凡百年余と
見え然れども近年此年
まで有りかく錦手に成り

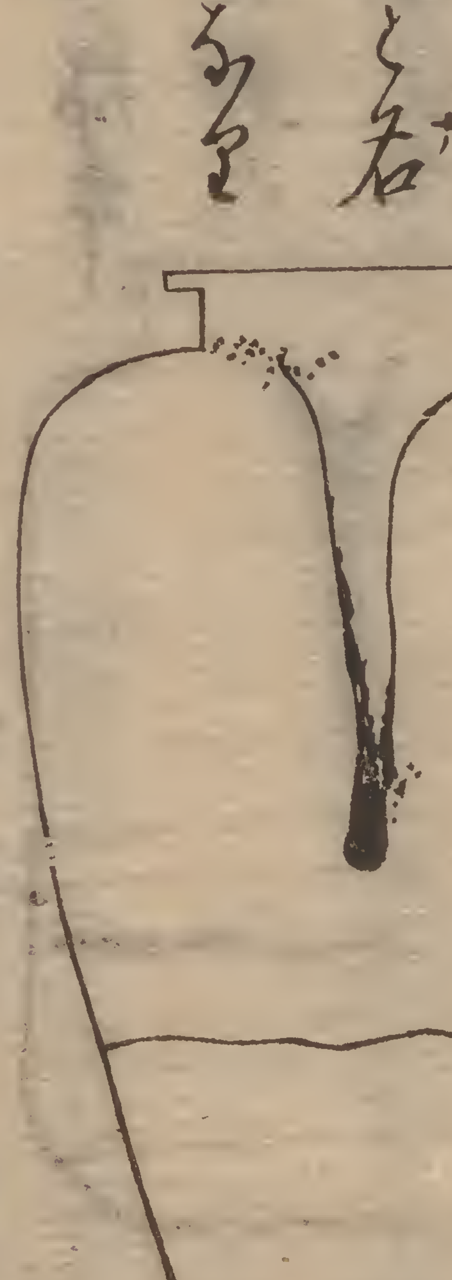


一古薄茶を又瀬黄とも口上なる糸切有り天然年末に
一下茶薄相当にて黄瀬也又此茶濃紙とても多く
らべとして上茶濃黄茶なれて瀬也

音羽手(ヲトハテ)

一 此は根元(コンゲン)此茶入は洛陽(ラクヤウ)の町人(チヤウニン)所持(ショヂ)せしる者也其
所蔵て年久しく或(アル)
時に此里(サト)に旅(タビ)して
求(モト)め給ひ音羽(ヲトハ)と名(ナ)
付られたるとなり
古哥に
音羽(ヲトハ)山(ヤマ)音(ヲト)に聞(キ)つゝ逢坂(アフサカ)の
関(セキ)のこなたに年をふるかな

又



よそにのみ聞(キ)かまし物を音羽川(ヲトハカハ)
渡(ワタ)るとはなしにみなれそめ(ソメ)けん
此茶入名付(ナヅケ)も二首の内何れか是(セ)ならん
口伝 撰(ツクリニテリカヘレ)返吉

一 古瀬戸色又浅黄色もあり
急物の為常也

一 古茶入濃柿色此滑(ナメ)らかなる薬立之 又薄柿色も有
墨(スミ)色もあり 上薬八黒薬に黄餅(アメ)色の薬交り釉(カ)る
地之 又艶(ツヤ)ある黄流也 此茶入も上薬(シャウクス)にて是(コレ)を掃之

・口(クチ)廣(ヒロ)手(テ)

一 此は名(ナ)なとも細ろし口は廣き故云爾茶入八

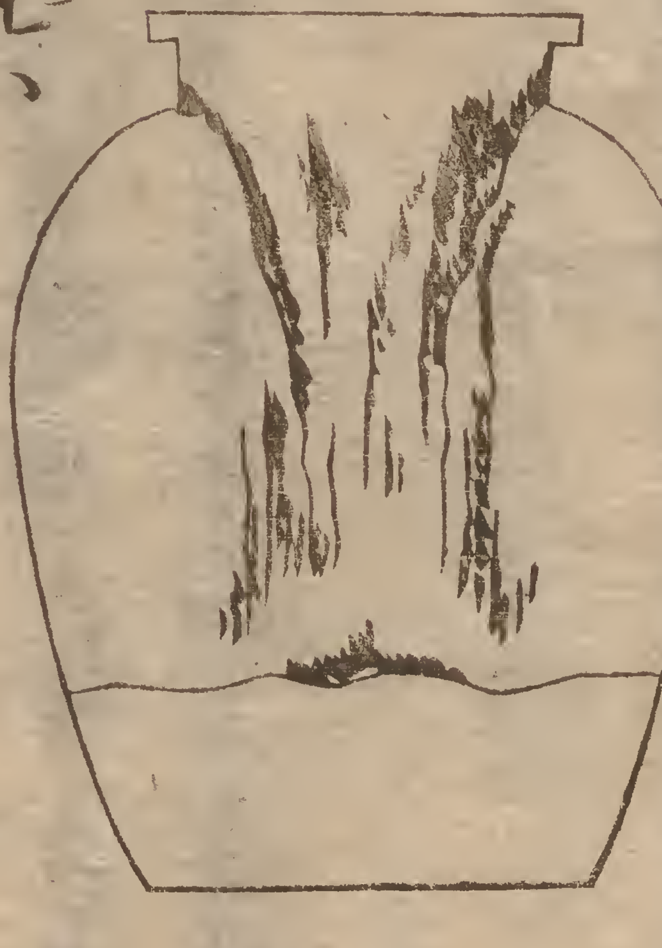
元禄年中に八一貞と云茶入此時代ありて壱
新茶入物を色々珍しと云々秘蔵して名故世にあるも有さて甲乙よ
加様之事ハ節か口五百貫と此売かいる也
一古ハ古瀬戸有りかし
是ハ書物也
一口瓶低し捻返し能
薄手ぬく細工吉也
其外茶入之外茶濃館
色此類よ小茶之上茶ハ薄茶色茶たろくと
かり流也ハ濃茶入茶此色清和よき茶之後し薄

一ハ茶入此かる茶入ハ稀なる也さすが薄茶茶入なるもよ叶う
也之外とも廣口と云類稀なる焼物之今一通り此
口廣と云ハ濃紙に此口此廣きをいつり此数も沢山なる
薄茶茶入也
一茶入の茶入ハ茶よ太口にて廣き也底よ向ぬかして
見んを要也し捻るなる事を茶入なる也全所作
其る也

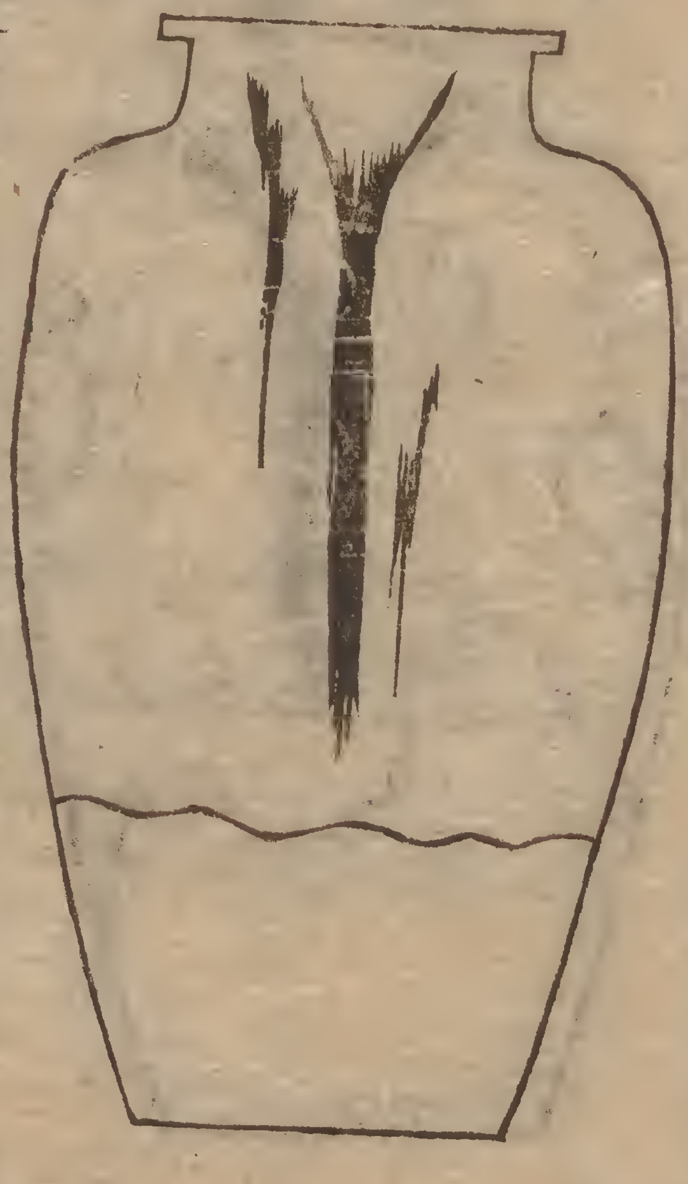
小川ハ年

一此茶入此称元ハ小川宗貞と云者京都にて焼たる所にて
則名字を茶入此銘とせずしけたぐひもあるなる也

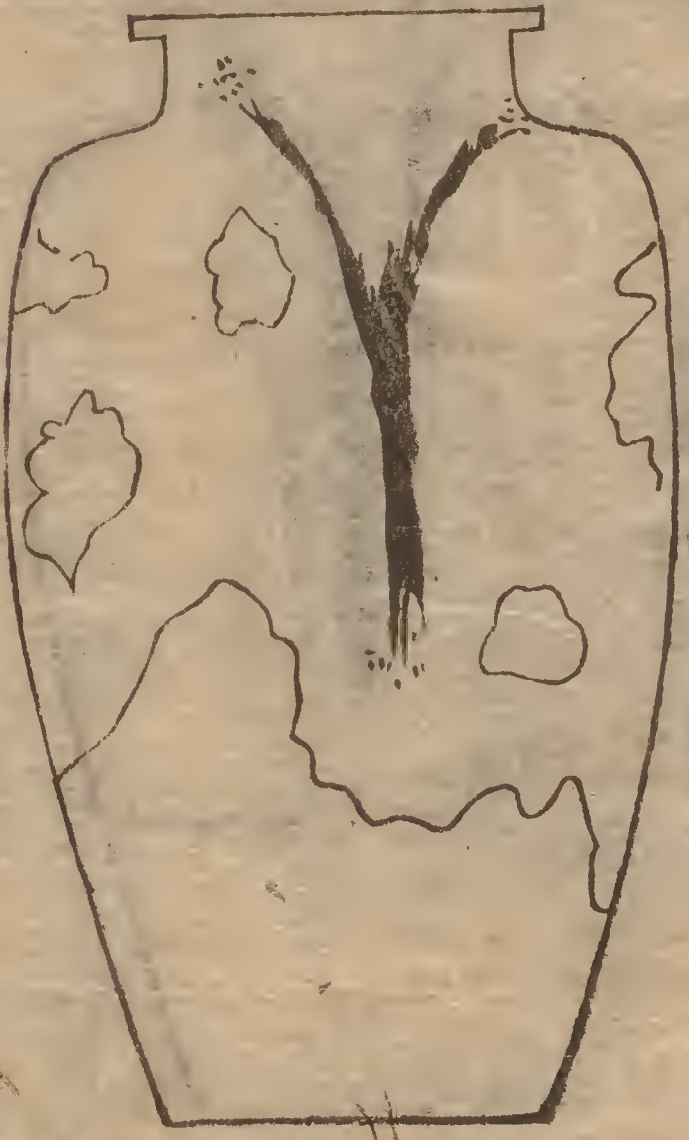
一 古濃(コヒ)茶色(イロ)ハ和(ヤハラ)らかなる也 糸切あらく口作り捻
返し尋常(ジンジヤウ)也
一 下り薬濃柿(コヒカキ)色ハ艶(ツヤ)よく
上薬黒薬濃薄(コヒウス)き色よ
茶薬ハましりて幾筋(イクスヂ)も
流(ナガ)れかゝる景(ケイ)色抱え様(ケンコン)ハ
芋子(イモノコ)ハ左(ム)前(ケイ)景色ハあるも おもかけある又白(シロ)きなかれ色ハ肉
よ薬茶も入ましりて片身替(カタミカハリ)ハ 薬入なりて薬溜(トヒ)
も手にひく 景色もなかく此形(ナリ)もよき也 底(ソコ)ハ無
今も銘は縁(フチ)をとり極(ゴク)上也



下り髪手(サゲガミテ)
一 此茶入ハ坊主(ボウズ)手(テ)ハ作(サク)と同手也 作茶經(タヽミ)手ハ外ハ
坊主手より清(キヨ)し
一 古瀬戸ハ口作(ツク)り
なき也 此茶ハ濃(コヒ)柿
色之上薬ハ如(ゴト)繪(レ)ニ
濃黒流色也 此下作(サク)
髪(カミ)ハよく薬溜りハ先きハかく なかれかゝる也 しの鵜(カロ)
此茶入も同作(トウサク)也
肥取手(カヒトリテ)



一 此茶入の名ハ衣(イ)行(ギャウ)の猪(ヅ)尻手といへり 其ゆへハ
茶ぐすりたらくして筋(スジ)かいがけに似(ニ)たる故名附と云
見るごとく名付給ふべし
一 古藤浅黄の肩(ニトリ)
にて見事なる物
なり 口ひろく捻返し
伽羅(キャラ)着(レヤ)めくよし
一 底(ソコ)ハ糸切なり 見るめあり 下茶濃柿色
流(レウミ)ように茶色 上茶ハ黒茶一面(タン)にむら〳〵と(ト)かゝり
そゝりよ 濃茶なくても かゝり同じ



早乙女(サヲトメ)手

一 此茶入(ソレ) 細(サイ)ハ手(テ)曲(クセ)にして 腰(コシ)帯(オビ)二筋(スヂ)切(キル)物是を早(サ)苗
なる女の二重(エ)帯(シビ)ある腰(コシ)本(モト)に前だれを懸たるに似たる故早乙女(サヲトメ)と云
と名付たるなり
一 古茶見て見え小砂(コスナ)地
藥(クリ)色の様ある常
にハ前にありたる也
一 底ハ糸切也 しかし厚(アツ)目之無色花形帯(レンジャウ)ゆく名物
一 上茶ハ濃黒茶あり 藥黒茶交りてむら〳〵と一面に
かゝりて地色茶の銀杏

一古瀬戸(セト)と云ハ辰(タツ)の市(イチ)遠州にて所持(シヨヂ)して秘蔵(ヒソウ)の茶入也大和(ヤマト)
の辰(タツ)の市と云里(サト)より出たる故に其名をよびて茶入とよ
ばれり古瀬戸也石目(イシメ)を口まで掛ゑし糸切かたち之
下薬稍かゝり黒きまで上薬黒薬もありてかゝる流(ナガ)れ極り
有る一寸ま満(タマリ)ありしやうなるごとくにてまく極よりある
古瀬戸の吉(ヨキ)薬ぐすりなるかゝりたり其故によろしき物也
一花(ハナ)落宗即口の四方より薬の黄(キリ)に色(シキ)紋(モン)あり或ハ梅(ハメ)沢(ヅナ)笹(サヽ)の葉(ハ)
加様の物を紋よりある故に花落宗即と云也又黄(キ)なる薬
即と云一通あり是ハ此黄(キ)飴(アメ)薬有艶(ツヤヨシ)能黄薬大がたにある
花落宗即古瀬戸黄此薬沼稍色上薬黒飴(アメ)黄飴文村雲(ムラクモ)也

一糸目(イトメ)茶入宗即の茶入ハ姥口多くなり(ナリ)多し薄(ウス)手にて極めて
古薬也胴(ドウ)に糸目ありて此作之腰(コシ)あり肩也古瀬戸黄
糸切轆轤(ロクロ)目之下薬稍色又滑(ガハキ)あり黒色也薬もあり
上薬の八分薬もありて村雲かゝる也又此薄稍よ上薬
薄黒く此形(ナリ)の其色もいかにも是也又黄薬飴薬胡麻(ゴ)薬也
さゝ濃く色ある物也
一虫喰(ムシクヒ)茶入宗即是ハ古薬を流したる跡(アト)あり故に古薄
赤色又薄浅黄ともいひ古瀬戸中座(ソコ)の所と出る也
此糸目あり糸切ハ細(カツ)く出る(カスカ)にまろき也下薬稍黄かゝり
黒ききで薬之上薬ハ細くて流(ナダ)れ也幾筋(イクスヂ)もかゝりてある
く

又ハ遠ひかゝる也なつめも此内にも有ひ此絵有也
一 瑕手(アテテ)是ハ前田家(ゴケ)ある由是好敷手也古き之後
四郎よ相続(スカタヨク)似たり古瀬戸也下薬黒し此柿(カキ)薬(アト)に
あるべし
一 卸(バツ)合(ワセ)手(テ)土薬文是ハ尻まで一ひとつに似たるもの也
古薬也糸切古下薬藤柿に溜掛り此あり上薬
藤四郎ヵ手に黄飴(アメ)薬かゝり流る也又一所にる飛(トビ)薬
一 信楽手是ハ尾張也此窯(カマ)めく焼故に信楽のよし云
古白也此胴にて推也丸く糸切之下薬濃柿也此胴へ
よく上薬黄黒也に黄飴文すゞしくて飛薬あり目

然(セン)一瓶あるべし此茶入ハ是ハ千(チ)利(リ)休よりて紹鴎(シヤウクワ)此物之
一 御(ミ)堂(トウ)坊主(ボウズ)此茶入ハ様(ニレ)なる也土ハ浅黄色多し薬ハ立胡(コ)麻
薬ありよく似るを茶入ハ古瀬戸也尻(ナカ)手に掛物之又坊主と
御堂坊主此後生海(ナ)鼠(コ)なり焼るもの古瀬戸を似(ニ)せて焼
たるもの也是もの又此薬藤柿也此薬ハ少し上薬黒
薬黄飴薬入(ニジリ)文てかゝる也又黒流る也黄あるべし此茶入も
一 山(ヤマ)道(ミチ)此茶入ハ作に此手曲(ゆがみ)して山にをかる此下かゝるに深(フカ)くと切
下薬ハ藤赤也少し黒所々に又柿薬もあり上薬ハ濃黒薬斑(ムラ)に
ある茶入ハ此絵有来之利休時代也也之
一 遠(トウ)山(ヤマ)右此同作之茶入此胴(トウ)にあるを切のある也

一釣鐘(ツリカネ)芋子(イモノコ)と云ハ瀬戸にて似たる也芋子の形なる口あるを
古瀬戸とちかし此茶入の下薬落附上薬ハ黒薬黄薬入
ともある也

一利休燒 古瀬戸色大形(スカタ)が様なうて箆目(ヘラメ)ありて薬溜
黒き事

一源十郎燒 利休時代此燒手上京此所にて始(ホン)むる故号す一説ハ
古帽にも數奇者ハ用ゆる茶此湯者もあり

一織部燒 古薬ハ利休同時之形格合(ナリカツカウ)ハ尻膨(シリフクラ)にかゝりたるもの有
付外色ハ此色も風物之古田氏物數奇此燒也

一鳴海(ナルミ)ハ此茶入高織部 某膳(ニケカウ)尾州鳴海にて燒(シヒ)之

竈(カマ)ともいふ其數(カス)六拾六燒せられし中に此名
を付らく鳴海と云は古瀬戸手のやくは後も名付たる
世間にて都(タク)ひ替(ニシ)ふて言出たる也又古瀬戸茶入下薬茶
薬にて梨地(ナシヂ)なる上薬にハ濃黄流色少しある也

一頭(カシラ)長手 茶入此揃頭(スカタクシ)立延(タチノビ)たる形にて金華山(キンクワサン)此頭長と
云ふも有り訖に茶事にあり古きもの也 茶入胴(ムラ)くとある
挽なり切(キリ)返し捻返し取りし茶と一色(キ)也

一漉紙(レフカミ)手 漉紙といふ茶入を立ちし喩(タトヘ)て俗(ソク)に云石造根(コン)
元此茶入ハ淺井氏所持と云し故又世にたまひ漉也古ハ茶入
とも又古とはいふ也此面石目此如くに茶入ハ茶入にて

して薄手なるを上御茶とす下茶ハ薄手なるもよからぬとす
又茶入の茶は掛にある茶立悪くと無る茶にもよき與
茶かし厚き流也るゝ又茶入茶は茶入の口をよる厚手あり
作るは掛合不透之 又云下茶ハ作るもの沢猿茶にも上流也を
薄茶茶入之世間にもはぶりと云茶入ハ俵竃とも云之
一 正意手 仲ハ猿茶之京都よりほうが室町四条下ル
町に住して服科を業として又瀬戸へ入らん茶入を焼
之利休時代の作者之古薄茶の地茶とおもさ紐茶
あどあるハつる丸にも茶切かさく切之元禄年中とハ一百年
余となる

一 赤熊手 是ハ坊主手とも云一作之熊手も也ひよハ錦手之
掛合細也も室しく茶無も奇別ふして見ゆ之尤ハ薄手也
口ゝと揺正しるべ常ふりて口切古地茶ハ濃柿色之上茶
ハ絵図の通りにして法黒茶之屑を紀き丸常細もよき也
を黒めしるよ喩て世間に赤熊手と云之

赤熊手

一遠霞手(トヲカスミテ) 此名付る事ハ至て甚底比内はなくも葉ひろく是
古き所ありし茶入まゝ之有故に遠霞と云古流茶入に是
大方此葉なる趣也 此葉ハ柄多く此能古上葉黒葉ちらく
と何事又上下に浅黒流也 常節も高く 又黒つき一節高き也
葉節高く厚く丸る元緑 兼中まく 戯下手すに乃て

一面影手(ヲモカケテ) 此根元ハ面影と云茶入を見て自ら携比人あく面影の
よし云ひて茶入を求め此形の茶入は小堀政一公(コホリマサカツ)の好みを以て茶入比
茶入 此手の茶入は古き茶入に比して其趣も花入之外切也
此葉落茶多か 上葉まで上葉にハ又好む流也
其の気色と絵具之

一鶏手(ニハトリテ) 此根元ハ遠州公並江雪此折節御鶏(ハタ)御茶湯
御會(クワイ)に此茶入を自ら携て出されし故ハ其人比内にて
此茶入を珍重し給ふ事多きに依て後此人茶入を此義(セン)
識者(ト)へしるして其後(ケ)に是に事にまかせ給ふ
ある時勝負(カケ)とりし也 此茶入は茶州公に給はり御存知ある
に鶏(ニハトリ)と名付られしが合せんとて勝負(シャウフ)あるときは心之又武
家に元来ハ能田神識(タツタノ)此人ハ茶入を茶入を給はりし故に鶏(ハトリ)
と云 比世(セイ)古流落茶多くして好古(コ)手の此形なる趣も
あり 口まで押立ちし吉多切(オリ)細く茶(キヤ)入(シヤ)也此葉
濃柄多と葉ハ浅落多くある事葉之

一壺ニ花入此ノ曲ありく思ふり必ず散ス又手ニお
手と世話ニ入り様ニ此面ありて下張ヲして思ふ所ニ
ニ似くるを好ミ所ニあらずれ方ニ残ぎ葉ら此
胴として結ふ之口ニ生て指る事之分切節番之
下葉流枝ノ又為ニ具ス色ニなる上ニ葉ハ濃ニ薄キ葉ニ実
餝葉交てもよろしかるべき之
一市場手ニ花入ハ古人小回此市所あり本めニ残
州云切ニ葉入此潮ニ用ひるに古為白又此細ニ生
胴ニ生る事ニ口ニ生ニ指して花者之或ニ括合ニ生
口ニ移らニ葉入る所之分切一際ニ入事之下葉為基也

又法極ニもえも為ニ見えもえ紙葉生ニ上葉ニハ濃為
きに此而葉ニ地ニ依し流ニ此不流也此根ニ
ニ又花葉入此手曲として葉形ニ
いくらく為ニあるく形括合ほニ入事之又撃ニ此流とも
又云滝ニ見ニ見え紙中まく百ニ十年ニある
一十王頭花入燗魔ニ此冠此称ニ消ハ十ニ頭口と合付
遊ニ八因生之此葉若餝ニ上葉ハ無流也之
一半切花入水掬みす切と云地あり集ニ此無ハ底之下葉
為極ニ上葉ハ葉若ハ餝葉もよろしくき
一大花ニ手根元ハ大花ニ流門紙より出る葉入 故ニ

仍く髭を立てりけれハ作ある也古渋多く作し茶
薄きとハ茶入によりくかゝる也口造り立のびく捻返し
留常之多切ハ常ほとく薄く切も透しにて見る也下茶稍
よろし紫地に上薬ハ飛薬也作ふ茶より黄葉まり色
て、如何く白てる也

一蟋蟀(キリギリス)手古白地也口造り捻返し昔より切見事なり
下茶薄く渋き也黄く見ゆ上茶ハ薄茶薄くたる
茶緑絲によりかき地之名縁年中より八百年計十年にて及ふ

一破風(カヒ)手是ハ茶入也手曲として茶留り絵描如く
にして破風口に似てる故喩て云銘之

一古白きる多よかしむくゝる
一口造り捻返し何かくに
見る之茶切花之
地茶薬にてかし見て

頃又茶也薬茶にて上流也ハ興の茶かし濃薄
く流てく見て又ハ自然宗薬ほかる茶入なる名縁
年中より八百年計之十年にて及ふ

一嵐大瓶手是ハ越州佐々大瓶茶入る也にて候て
銘にと付けたと嵐大瓶とて時代古切也嵐ち也此
茶立る故に嵐大瓶と見せたてくりちらしりて本

こゝろ作しかくくこゝろく小碗此定アるを極之口生をき
挽にし其後之条切ハ細く玉帯之下葉茶あふく
艶よくありあをよ云茶ハ乃上茶葉有雲此あらくはかりり文
古茶を新此茶とよふはかゝるもの也 茶入此摺あらし寸
孫ハ細工もよろしくてよ古き茶見風あるて古乃細を一茶入
なし壺形の透あらし形縁肩衝ハ茶箱之或説よ上
茶ハ茶ハ茶此流也又ハ與云ある流也ともいふ口伝有
元禄とハ三百年十年よ及よ
一 掛大瓶好茶入此摺ハよりくありて此肩衝多くさし錆て
ハ時代あるうよ掛此印あり此茶入よ古き古葉透あ

よきゆ故よ是を用る古茶杏文継藪此古くあるを
口生を挽にし残寄作をよめく能有ある也て洞気
切之外よ本切あらし是大瓶よ此手鉋りけ此様之勝葉
茶入此引鋸あらく深さと云くまるもの之下葉茶精之
ム流也をこ作し佐茶黄茶入と云てよ流条よくある也
又姥茶探此茶と云ハ是ハ茶入と云もるゝ又茶あり此茶
入もありし金鐺此鳶茶かかはとも云
一 祖母懐と云ハ尾州瀬戸此内よりむかしより云右伝る
手里小おかく焼茶入と云之古瀬戸と云之又茶あり此
此茶入も河口を口生を挽にし恰好丸条切めく

にあるゝ常に此壺切もあり二つ三つにて花香之下り茶ハ大方
悴・香露ものにや是なる茶湿し自然損茶なりし製紙
茶あり也ハ当世之上葉にハ黒飯をも茶入を紙茶之又或合ぬ
葉茶葉むくくと明るもあり刷目红浮にあらかる也
茶入盆ハ壺御　肩衝　丸壺　文之底に祖母懐と云
付けたる茶入もあり是も古瀬戸之類之
一茶碗屋焼　京寺町押小路上ル町に在る焼物之
名也ハ堺にて仕せり　京ゟ大坂へ茶碗に在る茶碗にと
多く焼とたり此茶碗能有るは乎目ある皆めも加へし
一八茶碗もあり利休時代に此焼手之